わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。

四章　奴隷狩り

砂浜に降りてきたのは、完全に武装した男達の一団であった。勇猛な肉体に、武骨なチェインメイルを纏い、頭には兜をかぶり、巨大な斧や剣を背負っている。
いかにも海賊といった男達が乗っていたのは、オールと申し訳程度の帆がついている小型の船である。男が六人も乗ればぎゅうぎゅう詰めになってしまう程度の大きさだ。
木陰の中から海賊の様子を眺めていた正臣は、海賊の乗っていた船に違和感を覚えて、怪訝そうな表情で小首を傾げる。
現在正臣や獣人達は森の木の上に登り、その葉の中に隠れて相手をうかがっている。幸い、相手は目ざとい人間ではないらしく、森の中で光る多数の眼には気づいていないようだ。
「今度は本当に奴隷狩りの連中のようだな」
そんな正臣の隣で木の枝に脚を掛けながら、遠目にその様子を見るのはシンバルだ。正臣の横で顎髭を撫でながら、さてどうしたものかと腕を組んでいる。
「俺達が来た時みたいに大勢で取り囲んだらお終いじゃないの？」
正臣の言葉に、いや、とシンバルは首を左右に振って見せた。そう簡単に行く話ではないらしい。
「ただ単純に剣だ、槍だの殴り合いならそれでいいのかもしれんが、あいつらは恐ろし

い魔法を使うからな」
「魔法？　いったいどんな？」
そういえばここ、剣と魔法の世界だったね……と、正臣は基本を思い返したように目を線にして声をあげる。この世界に来てから、正臣は結局魔法など一度も見た事が無かったので、そういう世界であることをすっかり忘れてしまっていた。
「地面から岩が這い出して脚を動けなくされてしまうんだ」
「へえ、そりゃクラシックな魔法ですこと。どう思いますA子さん」
「ドルイドとか呼ばれてる類の魔法っすね。ロックフットって名前の足止め魔法っすよ。足止めって言っても、一分も持たない子供だましっすけど」
「一分でも足止めできたら十分だろ」
あのヘラジカ相手に一分も足止めされるなんて、想像するだけで背筋が寒くなる。武器を振り回してくる人間相手に、一分間脚を動かさずによけ続けるのだって無茶な話だ。ワーと言えども倒されてしまうのは当然だと言える。
「怖すぎるから、とりあえず観察しようか」
魔法だって多分、相手が使おうと思わなければ使えるものじゃないんだろうしと、正臣は海賊達の装備に対して目を向ける。
海賊達は誰も彼も、似たり寄ったりの姿をしていて、基本的にはチェインメイルなどと呼ばれている鎖帷子を纏っている。チェインメイルに関しては、正臣も元の世界で画

像を見たことがある。間抜けな上着にしか見えないが、アレで優秀な防具であるらしい。
（あれを着こまれてると厄介だな……ん？）
正臣は後ろを歩いている海賊が、一人だけ鎧をまとわずに衣服のみで歩いているのに気づいた。分厚い革のコートを纏っている。誰も彼も似たような格好をしているので、うっかり見落とすところだったが、一人だけチェインメイルを纏っていないのだ。
「一人だけチェインメイルを身に着けてないやつがいるな。アイツだけなんか、普通に革のコートを着てるぞ」
「ドルイドの術は、鉄を纏っていると使えないらしいっすからね。だから鎧の代わりになめし革を着込んでるんでしょうね。もし魔法を使ってくるとしたらそいつでしょう」
例外として、銀やミスリル、オリハルコンといった希少金属で作られた鎧ならば魔法を使うこともできるらしい。しかし、そんな高級な装備を纏うような人間が有象無象の海賊などやっている訳が無いので、今は除外して考えてもよさそうだ。
正臣がA子と日本語で、「ああでもない、こうでもない」とやり取りをしているのを見て、シンバルは目を見張って不思議そうな顔をしている。
「戦士マサオミ、すまんが私にも判る言葉で話してくれないかな」
「ああ、悪いシンバル。多分魔法とやらをつかってくるとしたら、アイツだろうって話をしてたのさ。魔法を使われる前に森に誘い込んでしまおう。俺に考えがある」
正臣は共通語でシンバルに対して声をあげる。シンバルは短く一度だけ頷くと、正臣

と共に、森の奥へと歩き始めた。

○

「おかしいな。連中……俺達が砂浜に乗り上げれば、すぐに飛び掛かってくるはずなんだが」

砂浜についた海賊六名は、静まり返った砂浜に不穏な空気を感じ取っていた。それぞれ持っている斧や剣を構えて、注意深く砂浜を歩き始める。

「おい、バーツ。ワーの連中ってのは、今の今まで知恵をつけたことがあったか？」

「いや、無いな。アイツら基本的に馬鹿だよ。正面から突っ込んでくるしか能のない連中だ。身体能力の高さは厄介だが、魔法でちょっと足止めしてやれば簡単につかまえられる」

今までだってそうしてきただろう？と、剣を持った海賊の一人がリーダー格の男に声をあげる。それもそうだ、とげらげら笑いながら、男達は砂浜から森の方へ近づいていった。

「何か、連中の村でトラブルが起きているのかもしれないな。こっちにかまっていられないぐらいの大事件がさ」

「だとしたら好都合だ。その混乱に乗じて、ワーが大漁に捕獲できるかもしれない」

「連中待ち伏せするほど頭が良くないからな、今回は楽な仕事かもな。グロフィスの旦那は殺せっていってたけど、数匹捕まえたって怒られやしないだろ」
歩きながら言葉を交わしている海賊達の前に、不意に武装をしていないワーが姿を現した。子供だ。森の中で遊んでいたのだろうか。子供達は武装している海賊たちを見ると、ぎょっとした顔をして、慌てて集落の方へ逃げ出していった。
「やっぱりだ。大人連中はこっちに対応してる余裕がないらしい。あのガキどもを捕まえろ。とりあえず捕虜にするぜ。人質にできるかもしれねえ」
リーダー格の海賊が声をかけると、手下の海賊が二名ほどそちらへ走っていく。
その瞬間、走り出した手下達の前に、急に地面からロープがせりだした。
木陰に隠れていたワーの戦士二名が、タイミングを計ってロープを持ち上げたのである。走っている手下二名は、当たり前のようにそれに脚を取られ、倒れてしまう。
「なんだ！？」
見ていた残りの海賊達は慌てて武器を構えるが、もう遅い。
背後には既にワーの戦士達が立っていて、音もなく武器を振り下ろすと、海賊達は、次々に悲鳴を上げて倒れていった。
意識を朦朧とさせながら、海賊達は信じられないといった表情で地面に伏せっている。
ワー達が行ったことは、別に特別な事ではなく、ただ単純に気配を殺して、木の陰に隠れていただけであるが、その隠れていただけという行動が、海賊達にとっては予想だ

にしないことだったからだ。
狼が罠を仕掛けてくることを前提に、ライオンが銃を撃ってくることを前提に行動する狩人が居ないように、正面から突撃しかしてこないワーが、待ち伏せという搦手を使ってくることを彼らは想定していなかったのだ。
脳震盪を起こして倒れている海賊達の前に、次々と集まってくる獣人達。
海賊六人を捕縛するまでに掛かった時間は、わずか一分足らずであった。

○

「マサオミ、我らはこういう戦い方を好まないのだが」
ロープで簀巻きになった男達を見下ろしながら、シンバルや部族の戦士たちは腕を組んでため息をついていた。
ワーの戦士達にとって、戦いと言えば、正面から武器を持って正々堂々行うものである。ワー達の名誉の為に言えば、別に彼らは馬鹿ではなく、隠れたり、不意打ちを行ったりするような知恵が無いわけではない。しかし彼らは、戦う限りは戦士として、正々堂々戦う事以外を快しとしないのである。
勿論獣相手の「狩り」では、相手をおびき出したり、集中攻撃を行ったりもする。しかしそれは、あくまで逃げる獣と対等に正面切って戦うための方法であり、戦わずに楽

に勝とうという発想そのものがワーの戦士達にはあってはならないものなのだ。
平たく言えば、彼らの美学に反するのである。
だが正則は違う。基本的には、平和主義の日本人だ。戦わないで済むに越したことはないし、痛い目に遭いたくもない。ついでに相手も殺さないで済むならば最高だ。その為ならば、別に卑怯者や臆病者と言われても平気であった。
「正面から戦ってみんなを怪我をさせたくなかったんだよ。でも、効果はてきめんだっただろう、シンバル？」
「それは確かにその通りだが、どうにも勝った気がしない。不意打ちの類はこれっきりだぞ、マサオミ」
「神妙にするっすよー」
シンバルが大きくため息をつく傍らでは、海賊達はA子にきっちりと簀巻きにされている。縄抜けのやり方を知っている人間の縛り方は、当然それに対する対策も施されている。決して逃れることは出来ないだろう。
「武器や武装は取り上げて、船に乗せて送り返しましょう」
「いやいや、待てマサオミ。こいつらは悪人だぞ。殺さないと何をするかわからんぞ」
正臣の言い出した言葉を、シンバルが慌てて諌めようとする。奴隷狩りの人間はしっかり息の根を止めておかないと、いつまでたっても減ることが無いのだ。
「ワーの掟では、殺し合いはご法度だったはずだ」

「それはワー同士の話だ。侵略者は含まれていない！ それにこいつらは我々の同胞を何人も連れて行った。殺さなければ気が済まん！」
真っ向から否定するシンバルに、正臣は顔を上げて静かに言葉を返す。
「頼むシンバル。俺は人を殺したくないんだ」
異世界に来たから、人の命が軽いとか、剣と魔法の世界だから殺人が合法とされるとか、そういった思考停止は正臣の嫌うところである。人間を殺したら後悔する。正臣の直感が、その警鐘を鳴らし続けている。
じっと見つめて一歩も引かない正臣の視線に、シンバルはたじろいで一歩下がる。
正臣がここまで食い下がってきたことは初めてなのだ。シンバルは腕を組んでしばらく唸り「まぁ、婿殿がそういうならば」と声をあげる。
「わかった。食料と水以外の武器や鎧はとりあげて、こいつらは船に乗せて海にながそう。すぐ戻ってこられてもこまるから、ロープに切れ込みを入れてから流す。でいいな？」
「ああ、そうしてくれると嬉しい。そのあと彼らがどうなるかまでは……さすがに責任は持てないよ」
正臣が頷くと、シンバルは満足そうにうなずき返して、獣人達に男達を船に戻すように声をあげる。
「さすが船長。剣と魔法の世界の人間だから、別に殺っちまっても構わないとかいうと思ってたっす」

シンバルが行ってしまうと、A子がにやにやしながら日本語で話しかけてきた。
「見損なわないでくださいよA子さん。俺は非戦国家の日本人ですよ。人は殺しません」
「安いヒューマニズムは身を亡ぼすっすよ」
正臣の言葉に、A子があまっちょろいっすねぇ、と苦笑いして見せる。
「まあ、だとしても、私は船長が人殺しをあっさりやらなかったことに安心してるっす」
「……独善的だっていうのは十分解ってます。シンバル達の嫌がる手段を提案して、あまつさえ仇のような相手を殺すなんて止めて、そんな権利自分にあるのかって」
正臣はしばらくそこで言葉を止めた後、A子に向かって続けて声をあげる。
「でもやっぱり、人が死ぬのは良くないですよ。誰かが死んだら誰かが悲しむ。それだけは確かなんです」
正臣の言葉に、A子は柔らかく笑って、その肩に手を置いた。
「私は船長のそういうところ、嫌いじゃないっすよ」
正臣は頭をかいて、何を言うべきか見失い、困ったように笑って見せる。
「シンバルには後で謝りに行ってきます。ところでA子さん、海賊の攻撃、これで終わりだと思います？」
正臣がそのような問いかけを行うと、A子は感心したように声をあげる。
「よく見てるっすね、船長。勿論これで終わりじゃないと思うっすよ。あの船、どう見ても『小さすぎます』もの」

「ですよね、奴隷を捕まえて連れて行くっていうなら、乗ってきた船が小さ過ぎる」
正臣は最初から海賊の船に違和感を覚えていた。男が四人か五人も乗ったらいっぱいになりそうなボートに、六人がぎゅうぎゅう詰めに乗って、浜に上がってきたのだ。食料は、水は、何処に置いていたのだろう。
「俺達のバルシャより小さい船で、外洋が渡り切れるとは思えない。どう見てもあれは偵察用の船だ。奴隷を捕まえて連れて行くなら、外洋を渡れる大きな船がどこかにあるはず」
寝るときはどこで寝ていたのかも気になるし、どうみても「お土産」を載せて帰れる大きさではない。となると、海賊たちの「母船」があるだろうことは必然であり、偵察部隊が帰ってこないとなれば、本腰で武装した部隊がやってくる可能性は十分にある。
「シンバルに言って辺りを巡回します。相手の母船がどこかに居るかもしれない」
「気を付けてくださいっすよ船長。『この世界の人間と戦う』のはこれが初めてなんすからね」
A子が何を言わんとしているのかは、勿論理解しているつもりだ。
剣と魔法の世界の人間が何をしてくるのか、それは全く未知数だと言っているのである。正臣は深呼吸をして、シンバルの方に歩き始めた。その後姿を眺めながら、A子は心配そうに胸に手を当てるのだった。

○

「戦士マサオミ。本当に連中の母船なんて停泊しているのか？」
「多分、おそらく、きっと」
正臣とシンバル、そしてワーの戦士たちは、キャンプを中心に海岸線を捜索していた。おそらく、どこか停泊しやすい入り江にでも隠れて、小舟を出していたのだろうと正臣は考えたが、残念ながら海岸線のどこにもそれらしき船は見当たらない。
「あとはあっちの無人島か」
遠目にいくつも見える無人島へ目を向けて、正臣は腕を組んで困ったように声をあげる。あの島のどれかに隠れて停泊しているかもしれない可能性はかなり高いが、それを見つけようにも島の数が多すぎる。
「正臣が海賊を逃がしちゃうから、聞きそびれたにゃー」
「申し訳ない」
目を線にするワーの戦士に、正臣は気まずそうに声をあげる。
こちらの陸地から見えるような場所に、母船を停泊させるような間抜けが相手でもないだろうし、バルシャで探さないとこれ以上はお手上げだ。
後は、相手が手を出してきてくれるのを気長に待つかである。
「やめろタル。結果論で人を責めてはいかん。それよりもマサオミ。今回の人間どもは、

いつもと様子が違うぞ」
シンバルは海の向こうを眺めながら眉を顰める。
「いつもと違う？」
「いつもはもっと大人数でくるんだ。大きな船で砂浜に乗り上げるなり、何十人も飛び出してきて乱戦になる。六人程度で偵察に来るなんてのは今までなかった」
「そりゃあ、妙だな」
正臣もシンバルと同じように海のかなたを眺める。
確かに、通常の奴隷狩りならばこんな回りくどい偵察などする必要ないだろう。
森の中で海賊達の話を聞いていたが、相手はワーには知恵が無いと思い込んでいる。ならば、ワーの出方などうかがう必要はない。魔法の使える人間を雁首揃えて、一気に制圧するほうが理にかなっている。
「そうなると今回は、相手はいつもと違って奴隷狩りに来てる訳じゃないのかもしれないな。捕虜を逃がす前に、一回アイツらを問い詰めてみれば良かったな」
「いやまて、ホオヅキ、向こうの入り江に向かって小舟が進んでるにゃ」
戦士の一人が声を上げると、そこには小舟がこっそりと入り江に入っていく姿が見える。それは遠くの景色がわずかに揺れる程度の変化だったが、戦士達は決してその動きを見逃さなかった。
「ちょっと尾けてみよう。もしかしたら母船に連れて行ってくれるかもしれない」

「首尾よく見つけたら襲撃だ。行くぞ、皆」
シンバルの合図に全員で頷いて前傾姿勢になる。停泊している船が何隻かはわからないが、慎重に正臣達は小舟の後を追った。

正臣達がやってきた入江は、一度見て回った場所であった。最初に見たときは何もないように見えたが、実は絶壁の下には洞窟のような場所があってそこから船が入れるようになっていたのだ。
「こんなところに洞窟があったのか、気づかなかったな」
地元に住んでいるワー達も気づかないような穴場であったようで、一度通った時には見過ごしていた。ちょうど岩肌などが邪魔になって、あえてそこまでのぞき込みにこないと、この洞窟が存在することは確認できない構造になっている。
正臣達が岩伝いに洞窟の中に入り、進んでいく。幸い人間が歩けるだけの足場があり、そこを慎重に伝って進んでいった。夜になればこの洞窟もおそらく、海水でいっぱいになってしまうに違いない。
洞窟を抜けた先には絶壁で囲まれた砂浜のような場所ができている。空の鳥でもなければ見つけることができないような場所に、大型の船は停泊していた。
海賊達の母船はキャラベルと呼ばれる外洋船である。バルシャよりは遥かに大きな船で、近くに小舟が何隻か出入りしている。

「やはり母船はあったようだ」
影から隠れながら、正臣達は船の様子を確認している。船には二十人程の海賊達が乗っているようで、武器の手入れをしたり、樽を運んだりと停泊作業を行っているようだ。
「相手はまだ、こっちに発見されたことに気づいてないみたいだな」
伏せながらこっそりと覗き込んで、正臣が声をあげる。
するとシンバルはうむ、と声を上げて、洞窟から飛び出すとそのまま堂々と立ち上がった。
「我が名はシンバル！ 海賊達よ、我々はワー部族の誇り高き戦士である！」
「ちょっとなにやってんの！？」
突然叫び始めたシンバルの行動に、正臣は驚愕の表情を浮かべる。
「やっぱり不意打ちなんて性に合わないよ！」
「やったるにゃー！」
それと同時にワー達も立ち上がって、大声を上げ始めた。
「出たぞ、ワーだ！」
その声に反応して、それぞれ武装した男達が立ちあがる。
ワーは奇襲などを行わない。いつでも正々堂々というのが彼らの流儀だ。先の戦いでは正臣の顔を立てて奇襲を行ったが、やはりそのような戦い方は、彼らの戦士としての誇りが許さないのである。

「ああ、もう！ こればっかりはしかたないか」
正臣は頭を抱えるが、始まってしまったものは仕方がない。
「武器を構えよ、星霊の加護を祈れ！ 突撃！」
シンバルの号令と共に、曲刀を引き抜いたワーの戦士達が海賊船に襲い掛かっていく。
「ええい、どうにでもなれだ」
正臣もそれに続いて大地を掛けだした。

正臣は乱戦に脚を踏み入れながら、まずはその場にいる海賊達を全員見渡した。
幸い、全員が重たいチェインメイルに身を包んでおり、魔法を使ってきそうな相手は居ないようだ。
ワーの戦士達の強さは相当なもので、もつれての乱戦になるどころか、そのスピードで一方的にかく乱を行っている。
この身体能力で基本的な戦術を用いれば、かなり恐ろしい存在になるだろうに、正面突破しか頭にない彼らは、結果人間側にも対応できる存在に成り下がっている。
とはいえ、それは正臣の視点から見た価値観からの評価に過ぎない。自分達の不利を承知で尚、不意打ちや搦手を好まない彼らの気高い姿勢を誰が非難できるだろうか。武士道、騎士道、スポーツマンシップ等々、それに類するモットーというものは正臣の世界にもある。それ故に、正臣はそのことへの非難をあえて行おうとはしない。

正臣は腰に一応差している曲刀に手をかけたあと、抜くことを躊躇して手を放す。
これを抜いたらとっさに人を殺してしまうかもしれないと考えると、怖ろしくて刃物を抜くことが出来ないのだ。ヘラジカを「狩る」時とは違うのである。
しかし、相手は正臣の事情など考慮してはくれない。
何人も海賊は襲い掛かってくる海賊の動きを交わすように懐に入って、正臣は相手の顔を殴りつけるなどの応戦を行った。
殺したくは無いが、別に平和主義を押し通したい訳でもない。殺さない程度に相手を打ちのめすということは不可能ではないはずだ。
相手は基本的に重い装備に身を包んでいるので鈍重な動きばかり。挙動もはっきりしているので、しっかりと見ていればその攻撃が当たることは無い。
ワーの戦士達は次々に海賊達を倒していく。「切った張ったの戦いならば、決して劣りはしない」といったシンバルの言葉は正しいようであった。
隣では、シンバルが手にしている蛮刀で、海賊が振り下ろす斧を潜り抜けるように相手の喉元を切り裂いている。ひらりと蛮刀が蝶のように閃くと、海賊の喉から鮮血が吹き出て、相手はもんどりうって地面に転がっていく。
「戦士マサオミ、剣を抜け。戦いの場に於いてまだ殺したくないと駄々をこねるのか」
「駄々じゃない、これが俺の戦士としての流儀だ」
正臣が答えると、シンバルを眉をひそめて不愉快そうな顔をする。

「戦士マサオミよ、まさか私にまで戦いの最中に不殺せよとは言うまいな？」
シンバルの念を押すような言葉に、正臣は眉を顰める。
「……本当はそう言いたいよ。絶対に殺してもしかたない、なんて言わないからな。俺は相手を殺したりはしないし、シンバルが人を殺すのも良しとは言わない」
相手の武器を交わしながら、正臣は又気味に肘うちで相手の海賊の後頭部を打ち付けて気絶させる。
シンバルはてこでも意見を曲げない正臣に困ったように頭を掻いて、肩を竦めた。
「強情な奴だ。まぁ、それでこそ我が娘の婿にふさわしくはある」
しかたない、付き合ってやる、とでも言わんばかりにシンバルは拳を振り上げて海賊達の顔を殴打して気絶させる。棍棒のような腕から繰り出される拳打は、それだけで相手の顔を吹き飛ばすほどの威力を持っている。
「ありがとうシンバル」
「ふん、半年前の酒の借りを返していないからな」
この程度の相手、武器を使うまでも無いとばかりにシンバルは二、三人掴みあげて、海に放り投げる。
チェインメイルなどを着込んでいれば、それだけで最早泳ぐことは適わない。海に沈んでいく海賊を見ながらシンバルは吐息をついて次の連中に殴り掛かっていく。
状況は圧倒的にワーの方が有利だ。正臣が一人と戦っている間に、戦士達はそれぞれ

三人も四人も倒していく。戦士としての年季の差を感じて、正臣は改めてワーの戦士達に対して尊敬の念を覚えた。
しばらくすれば船の上にはワー達以外に動くものは居なくなっており、ワー達は勝利の雄叫びを上げてお互いに手を打ち合って見せる。
「勝ったにゃー！ 今夜は宴会にゃー！」
「意外とあっさり片付いたな。けが人はいないか？」
「マロが腕を切られたにゃ。かえって手当てするにゃ」
それは大変だ、と止血などの応急手当てをシンバルが行い始める。正臣は船を見渡しながら、船首の部分へと歩いて行く。何とか無事に帰れそうだな、と一息ついて海を見渡すと、自分の足元に落ちる陰に気づいて、正臣は顔を上げる。
そこには、入り江の崖の上に立っている一人の人影が居た。一年前に出会ってからそれっきりだった、テレサ・ティガールである。ちょうど太陽に重なる様に立っているので、正臣はまぶしそうに光を手で遮りながら、ぼんやりとテレサを見つめる。
「あいつ、なんでこんなところに」
正臣が小さく呟いたその時、テレサは正臣の方を指さして、何か声を上げた。
当然遠すぎてその言葉が聞こえることはなく、代わりに後ろから鋭い声があがる。
「マサオミ、後ろにゃ、避けるにゃー！」
その瞬間、正臣の見ている景色が急激な速度で回転する。

一瞬何が起こっているか判らず、正臣は混乱する。
しかし顔が激しく地面に打ち付けられたところで、正臣はようやく、自分が首の無くなった自身の胴体を見上げていることに気づいた。
（……あれ、俺の首が無いぞ？）
何が起こったのか状況が把握できないまま、正臣の視界は闇に沈む。
首をはねられた。
ただそれだけのことを理解する前に、正臣は息絶えた。

○

正臣は不思議な紅い海の中を漂っていた。
不思議と痛みは無かった。
正臣が感じているのは、水の中を落下し続けている感覚である。
心地の悪い浮遊感と、粘つく水をかき分けて沈んでいく不快な感触。
それを絶え間なく感じながら、正臣は赤い海の中をどこまでも、どこまでも沈んでいった。
魚のような生き物は居ない。
うすぼんやりと差し込む光だけで、水中はどこまでも照らされている。

体は、何故か動かす気にもなれず、正臣は水の中で浮かばずにただ沈み続ける。
何時かは、落ちるところまで落ちるのだろうが、地面はいつまでも来ることがない。
落ち続ける、というこの感触に、正臣は恐怖を覚えた。

今でもたまに、夢の中で脚を踏み外す夢を見ることがある。
次の瞬間には目が覚めて、自分が落ちなかったことに安堵する。
起きてから波打つ心臓を抑えつつ、本当に落ちた訳ではなかったことに安心する。

――落ちた。
――落ちた。
――でも落ちなかった。
――良かった。

そう言って、心から胸を撫でおろすのだ。
人生の脚を踏み外した機会など幾らでも訪れたというのに、大人になった今でも尚、あの落下の夢は恐ろしい。根本的な恐怖。まるで九死に一生でも得たかのような、形容できない恐怖が心を支配するのである。
現実で脚を踏み外して階段から落ちたところで、あんなに怖い思いをすることはない。

こけて、痛みがあり、やってしまったなと思って立ち上がれば終了だ。
怪我が残ることもあるが、それもしばらくすれば癒える程度のものでしかない。
正臣はたまに考えることがある。
何故、夢の中で落ちるのはあれほどまでに怖いのだろうか。
何故、夢の中で落ちてしまったとき、すぐに目覚めることが出来るのだろうかと。
あのまま落ち続けて、落ちるところまで落ちた時、果たして自分はどこへ行ってしまうのだろうか？
その答えに今、正臣は限りなく近づいている事を感じていた。
今日の夢はいつまでも覚めることが無い。
あの落ちる夢の中で、何処までもどこまでも落ち続けている。

気が付くと、正臣の落下は止まり、どこまでも真っ赤な海の水底に沈んでいた。
辺り一面血の海のようであるのに、しかし水の中は美しいまでに透明に透き通っている。時折揺らめくその視界は自分が水の中に沈んでいることを思わせ、息を吐き出せば、どこまでも泡沫（うたかた）が昇って行くのが見える。
だからきっと自分は、何処か紅い海のような場所に沈んでいるのだと、正臣はぼんやりと感じていた。そして、ここが美しい透き通った世界「ではない」ということも、正臣はすぐに悟る。ここは決して、美しい場所などではない。

この透き通った赤い世界は、汚く淀んだ泥水のような「中身」が沈殿した結果なのだ。
淀んでいる。どろどろに。流れも無く、唯々不純物が沼の底に沈殿していく。
結果、上澄みとなった紅い透き通った液体だけが残り、それがどこまでも美しく見える。たまに濁っても、その濁りは長い時間をかけて下へ下へと沈んでいき、全ては元の通りに戻っていく。
ならば、正臣が居るのはこの紅い海の底だ。降り積もった沈殿物の上に、当たり前のように正臣は積み重なっている。
（……俺、なんでこんなところにいるんだっけ？）
遥か上方には、ぼんやりとした光が見える。昔プールに潜って上を見たときはこんな、景色を見たことがある。どこまでも透明で、遠くまで見通すことのできる紅い上澄みの中を見渡した後、正臣は泡を吐きながら不意に横を見る。この透き通った海が上澄みであるというのならば、底へ沈むものが何であるのか、気になったからだ。
「――……！？」
その瞬間、正臣は絶句する。
そこに沈んでいるのは無数の人間だった。
折り重なる、人、人、人。
苦しむ表情。
泣き叫ぶ表情。

最早すべてを失って放心している顔。
怒りの形相で水面へ向かって手を伸ばす人。
あらゆる人間が沈み、折り重なり、そして苦しさに叫んでいる。
居るのは人間だけではない、耳の尖った人間や、ずんぐりむっくりのひげむくじゃら、ワーのような獣人もいれば、トカゲのような頭をしている者もいる。
ここはどこだ。ここはなんだ。
次の瞬間、思い出したように身体の感覚がよみがえり、正臣の全身に痛みが走り抜ける。初めて受ける痛みだ。焼けただれるような、皮をはがれるような痛み。それが全身を支配し続ける。正臣は自分の腕を見てすべてを理解した。肌が……無い。
「ぎゃぁあああああ！」
正臣は目を見開いて心の限り絶叫するが、その声に耳を傾けるものは居ない。
痛い、痛い、痛い、痛い、痛すぎる。
肌がじっくりと焼けて溶けていく感じとはこのような物なのだろうか。しかし、いつまでたっても肉は見えない。肌が焼けると同時に元の状態に戻っていく。そして元の状態に戻れば、また焼けてが繰り返される。
正臣は必死に腕を伸ばして水面を目指そうともがいた。
「いやだ、ここはいやだ、なんだよここ、ここはどこだよ、A子さん、カラッテ、シンバル、どこだ、どこにいるんだよ！」

絶叫するが、その声は響くことは無い。もがいても、水のように抵抗があるはずの沼の底から浮かびあがることが出来ない。もがいていると、焼けただれた腹が破れて、正臣は自分の腸（はらわた）が飛び出るのを見てしまう。
頭が可笑しくなりそうだった。悪夢なら早く覚めて欲しいと思った。
けれど覚めない。今日の夢は醒めないのだ。
「なんだ、兄貴も来たのか、随分早かったな」
正臣は聞こえた声に目を見開いて、隣を見る。そこには、顔が焼けただれている祐介が同じように沈んでいた。目は虚ろ。何度この苦痛を味わったのか、疲れ切った表情で正臣を見つめている。
「いらっしゃいお兄ちゃん。でも、まだ来るのは少し早いんじゃないかしら」
反対側には、同じように裸で溶ける、戻るを繰り返している妹の司が沈んでいる。
「大丈夫、私たちは失敗したけど、お兄ちゃんならきっと大丈夫」
「兄貴は転んでも、起きるのが上手だ。そうだろ？」
力なく祐介が口元に笑みを浮かべる。正臣は言葉を失っていたが、二人に向かって何かを叫んだ、叫びたかったはずだ。けれども、不意に正臣の腕を誰かがつかんで、正臣をその紅い沼から引き揚げていく。
「祐介、司、なんでお前らこんなところにいるんだよ。ここは、どこだ、俺は――」
最早、距離が離れすぎて二人が何かを言ったとしても聞こえる距離ではない。けれど

も二人とも、赤い水底でうっすらと笑って、確かに「がんばれ」と声を上げていた。

○

「タリタ・クミ」

その言葉を聞いて、正臣は目を開いた。気が付けば紅い海の底ではなく、見覚えのあるテントの中で、毛皮の上に寝そべっている。

視界に入ってきたのは、以前に確かに見たテレサ・ティガールの顔だった。横には泣きそうな顔をしているA子と、カラッテの二人組が居る。

「船長、だから言ったじゃないっすか、油断しちゃだめっすよー！」

正臣が目を開けたのとほぼ同時に、A子が思い切り正臣をゆさぶりはじめる。

「……今揺さぶると危ない。また首が取れる」

「気持ちはわかるけど落ち着いて！」

何気に恐ろしい台詞を吐きながらテレサが手を上げると、カラッテがA子を羽交い絞めにして取り押さえる。

「船長～！」

鼻水を垂らしながらぐすぐすと泣いているA子の様子を眺めつつ、正臣はしばらく状況が呑み込めずにぼんやりとしていた。次の瞬間、一気に我に返って、自分の首を慌て

て押さえながら起き上がる。
「あれ、俺、確か首が飛んだはずじゃ」
その様子を無表情で見つめているテレサに顔を向けて、正臣は小首を傾げる。記憶の中では、自分の首は確かに吹き飛んだハズであった。油断してぼんやりしているところを、後ろから海賊の生き残りに襲われたのだ。
身体能力が上がったところで、正臣も所詮は生身の人間。巨大な斧をぶつけられたら、首の一つや二つ、跳ぶ。
しかし首は確かにつながっていて、僅かな痛みはあるものの、泣き別れになる様子はない。意識を失っている間、何かとんでもないものを見ていたような気がするが、記憶が混濁していて正しく物事を認識することができなかった。
そんな正臣の様子に、テレサはしばらくその顔を覗き込み、考える。
小首をかしげ、悩み、そのあとぽん、と手を叩いてから、やはり無表情で「おお、正臣よ。死んでしまうとは情けない」などと、どこかで聞いた事のあるセリフを口走った。

○

「グルが居てくださって助かった」
めでたいめでたい、と笑いながら、シンバルは酒を飲んで浮かれている。

正臣がテントの外に出ると、ワーの面々は一斉に歓声を上げて、そのままお祝いの宴会に突入したのである。
初めて海賊達をほぼ無被害で退けたという功績は、ワー達にとっては諸手をあげて歓迎できる快挙であった。正臣の事故は残念なことであったが、しかし当人が蘇ったとなれば話は別だ。この素晴らしい出来事が、宴会に発展しないはずはない。
ワーの面々は大の宴会好きだ。ことあるごとに、キャンプの中心に集まって鍋を囲む宴会を行う。
決まって中央に鍋を置いて、そこに具材を入れてみんなで食べるのだ。
具材を入れる前には、民族衣装のような露出の多い服を着たワー達が躍り始める。
最初の内は何をやっているのかさっぱりわからなかった正臣だが、最近になって、彼らがようやく、共通語以外の言語で歌を歌っているのだということが理解できるようになった。
「あれは一体何の儀式なんだろうな。結局ちゃんと聞いた事は無いけれど」
「あれが、星霊祀りという儀式。食前の祈りのようなもの。彼らの崇拝する星霊全体に対して、感謝をささげる」
隣に座っているテレサが声を上げて、正臣に対して説明をして見せる。一年前はさっさと居なくなったが、今回は居なくならずに正臣の隣に座っている。
テレサは以前、向こうの世界で見た通りの姿をしていた。金色の髪に綺麗な碧眼。服

テレサ・ティガール

装こそ、こちらのローブのような服装を着ている。基本的には変化が無い。基本的には。
強いて言うとすれば、フードをかぶっていても解る不思議な動物の耳だろうか。
「なんで猫耳が生えてるんだ。お前」
「……いろいろありまして」
テレサは表情も変えずに言うが、その「いろいろ」にあらゆる出来事が込められているような気がして、正臣はそれ以上の追及をするのをやめた。
「そうかよ。ああ、ところで、さっき言ってた星霊ってなんだ？」
確かに、たまにシンバルが口にする言葉だ。星霊に祈れとか、星霊に恥じない狩りを行おうとか、そんなことを言っている。なんとなく聞き流していたが、彼らの文化の根底を形成するものなのだろうことはうっすらと理解出来てきたのだ。
遊牧生活のように厳しい自然の中で糧を得る毎日には、信仰という要素は欠かせない。人間にとって、大自然には思い通りにならない要素が多すぎる。今日は風が吹かないように、今日は雨が降らないように。牧草が見つかる様に等々、正臣とて、何かには祈らずにおられないような毎日を、この一年送ってきたのだ。
人間に宗教というものが必要ないのは、安穏と不安もなく生きられるぬるま湯の中だけだということを、正臣は実体験を通して悟ったのである。しかし、あいにく正臣は祈るべき神も、信じるべき宗教も知らない。とりあえず、あの白い女に祈るのだけは御免だった。

「彼らは自然を崇拝している。自然の現象一つ一つに、人格ある神が宿っていると信じている。原始的なアミニズム信仰。……けれど興味深いことに、この世界の自然現象には……特に自然災害のような強い現象には、本当にそれぞれの人格が宿っている」
テレサは湯気の立つ葡萄酒の入った盃を持ちながら声をあげる。
「アミニズム？　人格？」
「アミニズムとは、自然崇拝全般を意味する一番原始的な信仰現象。そこから多神教に発展し、最終的には一神教に到着する。私はそれらの宗教儀式の作法を彼らに教えている。それゆえにグルと呼ばれ、彼らに敬われている」
でも本当は、最終的には彼らには本当の神が居ることを伝えたい。テレサは小さな声でそうつぶやき、言葉を続ける。
「星霊の人格とはそのまま、文字通りの事。見て、聞いて、喋り、そして喜怒哀楽がある。それぞれの自然災害、大火災、暴風、大洪水、雷害、その他もろもろ、これらはすべて固有名詞が付いており、無作為に起こるのではなく、災害に宿った人格が故意に引き起こすものだと信じられている」
「迷信だろ？　自然現象に人格なんて宿るものかよ」
「ところが、実際に人格が宿っている。交信し、会話することも可能。そのような自然災害を捕獲して、安全に力を引き出す事こそが、ドルイド達の魔術の真骨頂」
流石は剣と魔法の世界。正臣は目を丸くして絶句する。自然災害が喋ったり、それを

捕まえて都合の良いように利用したりと、やることなすこと、色々と滅茶苦茶だ。
「それって、山火事を捕まえて火炎放射器として使うとか、そんな感じ？」
「大体あってる」
ばっちり、と親指をたてるテレサを見ながら、魔法っていうのは何でもありなんだな、と正臣は考える。その後正臣は自分の首を撫でて、思い出したように声を上げる。
「そういえばありがとうな、テレサ。俺の首がつながったのも、その魔法って奴のおかげなんだろ？ 魔法って奴を始めてみたよ、俺」
正臣が魔法などと言った途端、テレサは凄い剣幕で正臣に顔を近づけて、睨みつける。とはいっても無表情なので、怒っているかどうかも良く分からないが。
「魔法ではない。それは奇跡。神域神聖祈祷は、厳かな主の御業の顕れであって、決して魔法ではない。ご訂正求む」
「……ちょっと何言ってるのか良く解らない」
「聞け、正臣。この世には人ならざる領域が間に入り、下に人、上に神が居る。下からこの人ならざる領域に呪いや術を持って働きかけるのが魔術、魔法と呼ばれている行為。奇跡は根本的にそれらと異なる。私たちは祈りによって、この領域を飛び越え、人ならざる領域を統べる神に願うことで、神に奇跡の働きかけを行ってもらう」
「……？」
正臣が目を点にして首をかしげると、テレサは落胆するように吐息をついた後、頬を

膨らませてそっぽを向いてしまう。相当気に障ったらしい。正臣はとりあえず、自分がテレサの地雷を踏んだという事だけを理解した。
「いや、ほんと悪い。お礼が言いたかったんだよ。俺の事治療してくれてありがとうな。死んだかとおもったぜ」
「……死んでいた。貴方は確かに。そして見たはず。赤い部屋に入ったはず」
「紅い部屋……？」
そういえば、そんなところに沈んだ覚えがある。あそこでなにかトンデモ無いものを見た気がする。正臣は、無意識に恐怖で手が震えているのに気づいた。自分は一体何に怯えているのだろうか。
その様子を見ると、テレサは正臣に視線を向ける。
「三回」
「え……？」
「正臣が死ねるは三回まで。だから、命はくれぐれも大事にして欲しい。傷が治るから、けがが治るからと無謀なことは決して行わないで欲しい」
約束して、とテレサは手を伸ばして小指をみせる。それが指切りだと気が付いて、正臣は笑ってそこに指を絡めて見せる。
「わかった、俺だって死にたくないよ。約束な」
指切りを行うと、テレサは初めてにっこりと笑って見せる。

こいつ笑えるんだな、と正臣がそれに見入っていると、後ろから酔っぱらったA子が抱き着いてくる。
「船長〜、元気になったならA子もかまってくださいっすよー！」
「A子、マサオミは病み上がりだから駄目だってば！」
「ちょっと、A子さん、酒臭い！」
そのままA子が口を押えて、正臣の腕の中でげろげろと吐き始める。
（最悪だなこいつ）
などと思いながら、正臣は悲鳴をあげるカラッテに「良いから、良いから」と手を振って水場に向けて歩き始める。
そんな正臣達の様子を眺めながら、テレサはうっすらと口元に笑みを浮かべる。
「司、祐介……貴方達の希望が、お兄さんが、やっとこの世界に来ましたよ」
小さな声は、勿論独り言だ。他の誰にも聞こえない。テレサは立ち上がってローブのスカートを軽くはたくと、そのまま夜の闇の中に歩いて姿を消していった。

○

「浜辺に配置した屑共が全滅した？　ああ、そう」
同時刻。ワーの集落近くの無人島に、巨大な「母船」は隠れるように浮かんでいた。

それは、正臣達が襲撃したキャラベルより、更に巨大な軍船である。
その甲板にロッキングチェアを置いて、ゆっくりと寝そべっている男が一人。顔に刀傷のある悪人面の大男である。
年齢は二十七か八といったところだろうか。髭は生やしておらず、黒の短髪を後ろに流して、整髪用の油で固めている。
服装は革の黒いコートに革のズボン。コートの下は上半身裸といった様相だ。まさに海賊の船長といった形容がぴったりの風貌である。
しかし、彼の脇に立っているのは、真っ白な鎧と衣服に身を包んだ青年と少年だ。
この二人は、おおよそ海賊とは似つかわしくない恰好をしていた。
鎧には立派な紋章すら刻まれており、どう見ても騎士崩れには見えない。
「ガールウィ様の見立て通りでしたね。ワーの連中はとりあえずの敵母船を打ち取ったと油断しているようです」
「人間ってのは欲しいと願ってるものを自分で見つけ出したとき、周りが見えなくなるもんだからな。自分がハズレを掴んでるかもしれないなんて不安は、無意識に頭の外に追い出しちまうんだよ」
あとガールウィって呼ぶなと言いながら立ち上がって、男は騎士の青年を小突く。
「俺達は汚れ仕事でここに来てるんだ。悪党なんだよ俺達は。お前たちも自覚があるなら少しは忍べ。そんな真っ白な鎧なんてさっさと脱いじまえよ」

「俺達は誇り高き世界聖騎士団に属する聖騎士です。この鎧は脱げません。大体、我々聖騎士団がこんな遊牧大陸くんだりまでやってきて、何故こんな回りくどい事をして獣人の動向を伺っているんですか？」
隣に控えている少年が尋ねると、ガールウィと呼ばれた男は肩を竦めて返事をする。
「おいおい、それを俺に聞くのか。お前達に信仰心ってのはないのか？」
「その信仰に関わることが危惧されるから、聞いているのですよ」
少年の言にはハルヴェルトと呼ばれた青年も賛成のようで、男に尋ねて見せる。
「……やれやれ、命じられればたとえ地の果てまでも、って制約したんじゃないのかよ、聖騎士様よ。まぁいいや。神に『造られていない』、汚らわしい獣人どもを滅せよと、パリヨット枢機卿経由で教皇様からのご命令だ。つまり、今回の仕事は虐殺さ」
「汚らわしい？　虐殺？　確かに遊牧大陸にはグレートワンズの宣教は及んでいませんが、ただそれだけで邪悪なると断じてしまうのは如何なものかと」
「だとしても、教皇様が邪悪というなら邪悪なのさ」
「……そもそも、どうして教皇様はワーにそこまでこだわりになられるのでしょうか。ウェアウルフやフェルパーと何が違うのです？」
聖騎士ハルヴェルトは、上司の言葉に露骨に眉を顰め、尋ねる。フェルパーとは猫型の獣人のことで、ウェアウルフとは犬型の獣人のことである。ワーよりは人間よりの姿をしているのが特徴だが、実際のところ厳密な見分けはつかず、同じ種族に分類する賢

者も居るほどだ。
　ガールウィはその質問に舌打ちして、面倒くさそうに視線を右に、左に揺らして見せた。この男は、考え事をし、言葉を選んでいる時には必ずそういった仕草を見せる。
「子供ができない」
「は……？」
　ハルヴェルトの間抜けな声に、ガールウィは面倒くさそうに声を上げた。
「ワーの女を人間がいくら犯しても子供が産まれないそうだ。逆でも駄目らしい。フェルパーもウェアウルフも犯せば子供ができる。獣人だけじゃなく、この世のあらゆる『人間』として扱われている種族は、ヒューマンとの子供が出来るんだ。だがワーだけは違う。ワーは、ワー同士でしか子供が作れないんだ。これはもう、連中はこの世界の生態系から外れた存在。神に望まれて生まれた存在では無かろうと、そういう理屈らしい」
「屁理屈じゃないですか……そんなくだらない理由で」
　そう言いかけたハルヴェルトは、次の瞬間自分の喉元に光の刃が当てられていることに気づき、絶句した。
　ガールウィの持っている小枝から、半透明の光のようなものが伸びて、騎士の喉元にその切っ先を突き付けているのだ。
　それがあと一寸でも伸びようものなら、騎士の喉が貫かれることは必至である。
「言葉を選べ聖騎士ハルヴェルト。お前は暗黒騎士団行きが確実のエリートなんだろう

が？だったら、組織の中での生き方ってもんを少しは学びやがれ」
ガールウィはハルヴェルトに胡乱な目を向ける。
「神殿ってのは政治の世界だ。生き残りたいならもう少し賢く生きろ。お前の信仰が根底から否定されるような場面以外では、何を言われようが上に従え。上が黒と言えば、白でも黒になるんだ。それが神殿に生きる人間、聖騎士の生き方ってもんだろうが」
隣でそのやり取りを見つめるもう一人の少年は、絶句して口を出すこともできない。
「シモン・デュナーク。お前もよく覚えとけ。教皇陛下の言うことは、絶対だ」
「わかりました。……それで、どうされるんですか？ ガールウィ様」
恐る恐る、シモンと呼ばれた少年が声をあげると、ガールウィは頭をがりがりと掻きむしって、声を上げる。
「屑共の補充が到着するまではあと三日程度だったな。それまで待機だ」
「増援が到着次第、一息に押し寄せ獣人を虐殺するということですね」
「そうは簡単にいかねえよ」
確認するように声を上げるハルヴェルトに、グロフィスは顔を上げて答える。
「先発隊とはいえ、三十名近く雁首揃えた屑共がお縄になったんだ。どうやらワーの連中は、賢い『頭』を手に入れたらしい。これじゃあ、残りの屑共を差し向けても結果は同じだろうよ。多少は手こずらせるかもしれないが、結果は同じだろうさ」
「ではどうするんですか？」

ガールウィは懐から青色の美しい宝石の塊を取り出して見せる。
「あくまで増援は囮。派手に暴れさせてワー総出で対処させる。全員のこのこと砂浜に集まってきたところで、パリヨット枢機卿よりお預かりしてきたこれを使う」
「それは何ですか？」
「滅びの七夜の大星霊、海王イル・スオウの封印石だ」
「……は！？」
ハルヴェルトと、シモンの二人が目を見張って声をあげる。
「何を考えておいでですか！ それは封印にも封印を重ねて、大聖堂の最奥に安置されているはずのものではないですか。何故あなたが持っているのです？ 万が一暴走でもしたらどうされるんですか。それは災害そのもの、理知も解らぬ化け物なのですよ！」
「そうですよ。災害霊ってだけでも危ないのに、七大星霊なんて特大級のイカれた破壊兵器じゃないですか！ そんなの使ったら俺らまで殺されちゃいますよ！」
二人の付き人の顔には驚愕と焦りの表情が浮かんでおり、食ってかかるようにガールウィに詰め寄っている。
ポーカーに勝つために町一つを吹き飛ばすような、球技の試合に勝つために国そのものを危機に陥れるような、そのような過ぎた火力がガールウィの持つ星霊には秘められているのだ。
もっとも、ガールウィもそのやり取りには辟易しているのか、うんざりした顔で舌打

ちして声をあげた。
「なんでどいつもこいつも、俺が化け物の扱いを失敗するのを前提に話をしやがるんだ。使いどころ、扱い方、全て万全まで計算尽くした上での運用は行っている。壊すしか能のない化け物でも、うまく使えば利用価値はある。……まぁ、どう転んでも、これでワー共は全滅する。俺達の任務はそれで完了だ」
あと、とガールウィは声を上げて二人に指を突き付ける。
「そして俺は聖騎士副団長のガールウィ……ではない。今は悪党海賊のグロフィスだ。次に呼び間違えたら命は無いぞ」
二人ともはい、と生返事をしながら、グロフィスと名乗りなおした男の持っている青い宝石から目を離すことが出来ない。
爆発すれば間違いなくこの世界が吹き飛ぶような恐ろしい爆弾。そう形容するしかない物を、目の前の男が当たり前のように握っているからだ。
（星霊だぞ？　許されるのか？　ワー相手とは言え、そんな恐ろしい暴挙が）
ハルヴェルトも、シモンも目の前の現実が受け入れられずに、ただただ絶句するしかない。青い美しい宝石は、ガールウィの手の中で煌々と静かに輝いている。

○

翌朝、正臣とカラッテは腕を交えて練武を行っていた。武器を持たぬ素手同士、あとは何をやってもよい、そういうルールでの組手である。

正臣は、共通語を覚えてからの半年、カラッテと共にこの練武に明け暮れていた。身体能力は与えられた。しかしそれを扱う技術が自分に無い事を、知っていたからである。

最初、正臣は体術や戦術を教えてくれる相手を探してワーの戦士のねぐらを訪ね歩いたが、ワーの戦士達がそれを教えてくれる事はなかった。

ワーの戦士達は、狩りを行わない時間は大抵武器の手入れをしているか、寝ているかのどちらかなのである。武器の手入れをしている時に話しかけると、凄い剣幕でにらまれるし、寝ているところを起こされると顔を爪で引っかかれることもしばしばだ。

ワーの戦士に遊んでいる時間はない、とまで言うと言い過ぎではあるが、正臣が訪ねて行ってもまるで相手にして貰えなかったのである。

そんな中で、正臣の練習相手をかって出てくれた奇特な獣人が居た。

カラッテである。

彼女は族長シンバルの娘であり、ワーの戦士と何ら遜色のない身体能力、そして戦闘力を養っていた。

彼女が狩り組に入らずに羊の世話をしているのは、平たく言えばシンバルの親バカのせいであり、カラッテ自身は普段から狩り組に入ることを熱望している。そしてそれだけの素養を彼女は十分に持っているのだ。カラッテは自分が戦士に数えられないことを、

非常に不満に思って、いつも正臣に愚痴っていた。
そんなわけで、ワーの戦士と同じ戦いの練度を持ちながら、戦士達と違って暇を持て余している彼女は正臣の格好の練習相手である。
正臣はカラッテに教わりながら、半年間体術を養った。その後も毎日欠かさず、彼女との組手を行っているのである。
今現在は、「先の先（せんのせん）」と呼ばれる技術の稽古を行っている。胡坐をかいて相手と向かい合い、相手が手を上げるよりも先に手を上げるという、よくわからない練習だ。
相手の挙動を見て、手を上げる。成功すると、わずかにずれて相手の手が上がる。早すぎてもいけない、遅すぎてもいけない。先を取ろうとした相手の一瞬先の虚を突く。それが先の先と呼ばれる技術の妙なのである。
ちなみに先の先が成功しているかどうかは、手を上げようとした相手にしかわからない。まるで見当違いな手のあげ方をした場合、正臣はカラッテからのチョップの制裁を受けることになる。
勢いよく手を上げると、「はずれ」と言われてカラッテは正臣の頭にチョップを行う。たとえカラッテが手を上げなかったとしても、成功している場合は怒られないで済む。
本当にこんな練習が実戦で役に立つのかと常々疑問に思うが、実際ヘラジカを仕留める際に何度も役に立っているので反論する事ができない。

「マサオミ。首をはねられるとか、たるんでるよ。気を抜きすぎてるからそうなるんだよ。いつも言ってるよね？ 常に周りの気配に、特に殺気を感じたらまず飛びのけって」
「悪い。一応気を付けてはいたんだけど」
正臣が謝罪しても、カラッテはじっとりした目つきで恨めしそうに睨み返してくるだけだ。取り乱すA子を押さえる役目に終始回っていたが、カラッテとて冷静だった訳ではない。目の前に自分よりも取り乱している誰かがいたので、それを押さえることで正気をかろうじて保っていただけなのである。
むす、とした顔でカラッテは、胡坐の姿勢から手をついて思い切り右足を真上に突きあげる。不意打ちだ、正臣の顎を蹴り上げようと狙って見せる。
正臣は手を上げようとした瞬間、カラッテの挙動をみて、慌てて後ろに飛びのいた。正臣が飛びのいたのはカラッテが蹴り上げようとしたコンマ数秒ほど先のこと。
「できるじゃん先の先！ なんでそれで首を跳ねられるかな！？」
真面目にやれ、と言わんばかりにぷりぷりと怒って、カラッテはそのまま飛び上がって着地し、正臣に殴りかかる。
先の先の稽古は終わり、次は組手の稽古だ。
正臣は挙動の一つ一つを見ながらそれを回避していく。
「右の五」
「正解」

「下の二、から左の三」
「うん、その通り」
相手の動きを見ながら、相手の選ぶ攻撃の型を、相手の動きより先に言うのが練習の一環だ。当然避けることも必要になってくる。いちいち声に出して言うのは、自分の『読み』が正しいかどうかを相手に採点して貰う為である。
「下の四」
「残念、右の二」
間違えるとカラッテの攻撃が正臣に突き刺さる。伏せ気味に正臣の腹部にカラッテの肘が入り、正臣はおなかを押さえてその場にごろごろと転がる。
「いってぇえええ！」
「二度と不意打ちなんてされないように、今日は徹底的に鍛えるんだから！　いい、正臣、足腰立って今夜が迎えられるとは思わないことだね」
「勘弁してくれ」
よろよろと正臣が立ち上がると、そこにA子が走ってくる。
「ちょっと、ちょっと船長。大変っすよ！」
その慌てようはいつもの冗談の雰囲気ではない。
怪訝そうな顔でカラッテと正臣がA子を見つめる。
「先日捕まえた捕虜を尋問してたら、とんでもないことを吐いたんす！」

ちょっと、来い、と言わんばかりにＡ子は正臣に手招きをして見せた。

○

先日のキャラベルの戦いで、海賊が全員死んだ訳ではない。もちろん死んだ海賊も多かったが、正臣やシンバルが気絶させた数人は、捕虜として捕まえているのである。

そんな捕虜達に対して尋問を行ったところ、海賊達が恐ろしい情報を吐いたのである。

今回やってきた海賊の一団が、捕虜を捕まえるための略奪隊ではないという事実であった。母船だと思われていたキャラベルも、随伴艦の一つにすぎず、真の母艦はワーを滅ぼすためにやってきた、超巨大な戦艦らしい。本来ワーを捕まえては奴隷にするのを生業にしていた海賊達だが、今回はその戦艦の主に金で雇われたと言うのだ。

海賊達はこの場所から、一刻も早く離れたがっており、無事に逃がすことを条件に情報をあっさりと白状した。

海賊達の役目は、ワー達が通常通りの生活をしているかどうか、偵察することだった。いつも通りに、いつもの場所に、いつものように生活しているかを確認して来いと言われた訳である。

何か大規模な損害を相手に与えようとする際、たまたま祭りか何かの催しで、いつもいるはずの場所に誰も居ないとなれば、その攻撃は空振りに終わってしまう。それを防

ぐ為には、普段からワーと接している斥候が必要になるのだ。
金払いが良く、経費も依頼主持ちだというので、海賊達は一も二も無くその話に飛びついた。なんで偵察などをするのかと聞けば、彼らはワーを滅ぼすために活動していると答えた。
海賊達はその言葉を聞いて内心鼻で笑った。
ワーたちの強靭な身体能力と繁殖力を見れば、人間ごときが何をしようが彼らを滅ぼすことなどできないことは明白である
普段からワーと刃を交えている海賊なら尚更のこと。ワーを滅ぼすなどという世迷い事は、夢想家の妄想にしか聞こえなかったのである。
妄想に取りつかれた金払いの良い差別主義者。金持ちの道楽。海賊達は、依頼人をそういう人物だと評価して仕事をうけた。
彼らは気にもしていなかったが、偵察に失敗した場合、怖ろしい兵器の巻き添えになって殺される、命は無いと脅されていたらしい。
だが勿論、そんな脅しで憶するようなら、海賊稼業など最初からやってはいない。当然それらの言葉はただの妄想だと鼻で笑っていたし、よしんばそれが事実だとしても、「要するにヘマしなけりゃ良いんだろ」の一言で方がつくのである。
そして、意気揚々と海賊達は陸地に上がってキャンプを作ろうとしていたところで、正臣達に襲撃されたのだ。

「悪いことは言わねえから、あんたらも早く逃げたほうが良いぜ。俺達も解いてくれよ、今更暴れたりなんてしないからさ」
「いやいやいや、お前らの雇い主は単なる妄想狂なんだろ？　なんでそんなに慌ててるんだよ。別に放っておいたって、お前らの見立てじゃ人畜無害な金持ちの道楽なんじゃないのか？」
　正臣が声を上げると、海賊達はうなだれて首を横に振った。
「その話には続きがあるんだ。俺さ、聞いちまったんだよ。その依頼主の護衛っぽい騎士が、依頼人のことをガールウィって名前で呼んでるのをさ」
　その名前を聞いて、A子が目を丸くする。
「ガールウィって、『狂い』の聖騎士ガールウィのことっすか？」
「そうなんだよ、確かに言われてみればどっかで聞いたことのある顔だと思ってたんだ。顔の真ん中に刀傷、でかい図体。間違いないよ。あいつは世界正騎士団の『狂い』だ」
「A子さん、そのガールウィって奴、何者なんですか？」
「聖騎士ガールウィは、神聖帝国セレンにある、世界聖騎士団の副団長っす。汚れ仕事を中心に、神殿の命令とあればなんでもやってのける狂信者……らしいっすよ」
「何それ超怖い」
　正臣の言葉に、海賊達は落ち着かない様子で「もういいだろう、逃がしてくれ」と声を上げ続ける。

「神聖帝国は、名前の通りこの世界の宗教建築物が集中する場所っす。近くの遺跡から様々な魔法の品が発掘されて、今現在、世界で一番技術が進んでいる国って言われているっす」
「技術なんて言ったって、所詮は剣と魔法の国でしょ？」
「部分的に産業革命まで技術が進んでいると言われているっす」
「剣と魔法の世界だよね！？　ここ！」
とんでもない単語がＡ子の口から飛び出して、正臣は混乱するが、今の本題はそこではないことに気づいて、大きく息をついて仕切りなおす。
「まあ、例えそんな『狂い』とやらが依頼主だったとして、何がヤバいんだよ？」
「ヤバいも何も、あいつ俺達に見せびらかしたんだ。星霊石をさ。これが滅びの七夜の一格だって、これをつかってワーを滅ぼすって言ったんだ」
「滅びの七夜！？」
今度はＡ子だけではない、シンバルも、カラッテも、他のワーの面々も、全員顔を真っ青にして目を見合わせる。
「滅びの七夜、大星霊イル・スオウ。それを使ってワー達を滅ぼすと言ってたんだ。最初は馬鹿にしてたんだよ。誇大妄想狂にしたって、もう少しマシな嘘をつけって。でもあいつは『狂い』のガールウィなんだ。もし本当にガールウィなら、そいつは冗談なんて言わない、いつでも本気だ。俺達まで殺されちまうんだよ」

「滅びの七夜？」
正臣だけ周りがなんで慌てているのか理解できずに、腕を組んで小首をかしげる。正臣が状況を理解できていないことに気づいて、A子が声をあげた。
「船長、ノアの大洪水って知っていますか？」
「いやいやいや、馬鹿にしないでくださいよ。一般常識でしょう。確か世界を飲み込んだ大洪水でしたっけ？」
「じゃあ、イエローストーンの大噴火は？」
「知ってますよ。起こったら世界が滅びるって言われてる大火山でしょ？」
「この世界で、同じような現象を起こしたのが滅びの七夜と言われる大星霊なんす」
「……は！？」
話が大きくなりすぎて訳が判らないと正臣は間抜けな声を上げる。A子は腕を組んで、うなりながら説明を行った。
実は、神話の記述によると、この世界は五百年ほど昔に一度滅びているという。それまであった世界や文明は、七日間をかけて一度完全に消滅し、そしてその僅かな生き残りが五百年かけて現在の状態まで文明を作り直したというのだ。
その時、一日一日、世界を様々な自然災害が襲ったという。
一日目は、世界を包む洪水が起きた。
二日目は、世界を吹き荒れる台風が起こった。

三日目は、世界に降り注ぐ雷が起こった。
四日目は、世界を燃やし尽くすほどの大火災が襲った。
五日目は、世界を打ち壊す大地震が起こった。
六日目は、世界を揺るがす、致死性の伝染病が覆った。
七日目は、世界をマグマで飲み込む大噴火が起こった。
第一格海王イル・スオウ、第二格暴風カタリーナ、第三格雷帝カラデ・フリンゲル、第四格炎王ガラデ・グラ、第五格深淵主グラン・ドリエ、第六格冥王ヨヘン・ハイム、第七格硫黄火フルーナ・ギル。これらを総称して滅びの七夜と呼ぶのである。
「なんて言われたところで、船長にはいまいちピンと来ないでしょうね。この世界に来てまだ碌に魔法も見て無いんすから」
「星霊ってのは知ってるよ。テレサから聞いたからな。それって、カラッテ達が信じてる神様みたいなもんなんだろう？」
実際、正臣はいつも鍋の前にカラッテやワー達が星霊祀りを行っているところを見ているのである。
「いや、だからこそ。それを使ってワーを滅ぼせば、ワーの心を折ることができるんすよ。相手の信じている神の力で相手を滅ぼせば、相手は甘んじてその滅びを受け入れる方へ流れるっす。性格悪いやり方っすね」
腕を組みながらA子がワー達を見つめる。ワー達は全員顔面蒼白だ。自分達を星霊が

滅ぼすというのならば、彼らは本当にそれを受けるしかないのであろう。
「我々は星霊と共に生き、星霊を祀ってやってきた。星霊が私達を滅ぼすというのならば、それを甘んじて受けるしかなかろう」
苦渋の表情でシンバルも顔を伏せる。胸中には様々な思いがあるのだろう。実際にそんな簡単な話ではないことは、正臣にも判る。
「そんなバカな話があるもんか。星霊だかなんだか知らないが、ワーを滅ぼす権利なんかないはずだ。大体、ハッタリかもしれないんだろ？　いきなり諦めてどうするんだよ」
正臣の言葉に、シンバル達はそうだったと顔をあげる。
「そうか、相手の狂言と言う線も消えていないのを忘れていた。いずれにせよ、我々は今出来ることをやるしかない」
「そうにゃ、もし星霊石が本物でも、使う前に取り上げてしまえば良いんだにゃ！」
戦意喪失に近い状態にあったワー達も、シンバルが立ち直るのを見ると元気を取り戻して、やってやるぞとばかりに次々に声を上げ始める。
「馬鹿か。相手はガールウィだぞ。戦ってどうにかなる相手じゃないんだよ」
そんな勢いに水を差すように、脂汗を零す海賊達が声をあげる。
「そろそろだ。そろそろのはずだ。三日後に増援が来るって言っていた。早く逃げろ、殺されるぞ！」
海賊達の悲鳴のような声と同時に、転がり込むようにしてワーの子供がテントに飛び

込んでくる。真っ青な顔で、海の方向を指さしながら、声をあげるのだ。
「シンバル、海、海、海が！ 海賊がいっぱい来た！」
その言葉に、その場の全員が目を見張って海の方へ一斉に振り返った。

正臣達が慌てて海が見える場所まで走ってくると、そこには十隻以上のキャラベルが海岸へ向かってくる光景が見える。単純計算で、正臣達が襲った船の十倍以上の海賊がこちらへ向かって進んでいるということだ。
最悪、更に大人数が乗っている可能性もある。最初から揚陸占領を目的に準備を整えている場合、船の中には最大限の兵隊が詰め込まれている筈だ。
「いつもの奴隷狩りの規模ではないぞ。何なのだこれは」
シンバルも目を見張って額に手をかざして横一列に威圧するように迫ってくる船達を見つめている。そのキャラベル達のさらに後方には、もっと巨大な船が浮かんでいるのが見える。正臣達のバルシャがおもちゃに見えるような大きさだ。
「戦艦ガレオンじゃないっすか。この世界じゃ一国の主力戦艦クラスっすよ」
「でけぇ……！」
その巨大さに正臣は絶句するが、幸い船というものはすぐに迫っては来ない。打ち合わせる時間ぐらいはあるばずだ。正臣達は集まり、その場に座って円になる。
「正面から正々堂々戦うのがワーの流儀だ。何人来ようがそれは変わらない。戦って敗

れるならばそれは戦士の本懐というものだ」
シンバルが、とりあえず自分達ワーのスタンスを表明するために真っ先に声を上げる。ワーの狩り組の戦士達もシンバルの意見に異論はないようで、全員腕を組んでうなずいている。星霊は怖いが、人間相手なら絶望的な戦力差でも怖くはないらしい。
正臣はそんなワー達の態度の変化を興味深げに観察しながら、腕を組んでしばらく考えた。ワー達の身体能力、戦闘能力ははっきり言って人間が太刀打ち出来るものではない。前にキャラベルを襲った時の彼らの動きを見ていればそれは明白であった。
ワー達の弱点は星霊である。彼らの星霊信仰を逆手に取った攻撃は、実質的な被害より精神的な部分で深刻な被害をもたらす。それは何としても避けなければならない。
とにかく相手を、滅びの七夜とか呼ばれる強大な星霊を使う前に制圧するのが勝利への必要条件だ。そこさえ何とかすれば、海賊が何人でかかってきてもワー側に十分勝機があるはずだ。
「バルシャを使いましょう」
正臣が声を上げると、A子は無言でうなずいた。
「シンバル達の流儀に口を挟む気はない。正面から存分に戦って貰えばいいと思う」
「正臣は話がわかるにゃー」
その言葉にワーの戦士達は機嫌をよくして尻尾をゆらす。
「ただし、そのうち何人かは俺とA子さんとバルシャに乗って、海に出る。あのガレオ

ンは、近くの無人島の西側を通過してこちらにくるみたいだから、東回りの部分は相手にとって死角になるはずだ」
　正臣は木の枝で絵を書いてワー達に説明する。
「あの無人島を東側から回り込んで、ガレオンの後方に回り、乗り込んで相手の親玉を押さえる。ワーに船はないし、相手は揚陸に集中するだろうから、きっと後ろの方には注意を払わないはず。相手の親玉をどうにかできないでも、最悪星霊石とやらを盗み出してしまえば、こっちに十分勝機が生まれる」
「海岸までは逆風。ガレオンもキャラベルも横帆だから、あの船足だとここまで来るのにあと六時間ぐらいっすかね。その間に無人島を迂回しきりましょう。まわりきった頃には、丁度ガレオンのお尻が見えるはずっすよ」
　正臣の提案に、ワー達は全会一致で賛成する。全員御互いに顔を見合わせて、うなずき。自らの武器を握って立ち上がる。
「時間制限はあと六時間だ。子供を山へ逃がし、武器を持てる者は武器を持て。兵糧の準備を行い、長期戦に備えろ！　我ら誇り高きワーの部族は、ただいまより人間との全面戦争に入る！」
　シンバルの号令と共に、ワー達は急いで戦いの準備取り掛かりはじめる。
「……よし、それじゃ俺達も行きましょうかA子さん」
「今度は、首が飛ばないようにしてくださいっすよ？　船長」

「油断大敵だからね、マサオミ。次は無いよ？」
「わかってるよ」
A子やカラッテににらまれつつ、正臣は針の筵の想いでバルシャに向かい始めた。

○

「あいつら船が怖いってなんだよ。自分たちの存亡の危機なのにそれでいいのか？」
正臣達は作戦通りにワーの戦士に協力者を募って、バルシャで海に漕ぎ出した。
しかし、結局バルシャに乗っているのは正臣とA子、そして族長の娘のカラッテだけである。
正臣の案には誰も彼も目を輝かせて賛成したものの、いざ協力者を募ると誰も立ち上がらなかった。結果、全員の同意を得られながらも、協力者を得られることなく正臣達は海へ漕ぎだす羽目になったのだ。
この体たらくにカラッテは苦笑して、「ごめんね」と正臣に声をあげる
「私達ワーにとって、海の外に乗り出すのは禁忌中の禁忌なの。海の外は星霊の世界。踏み込んだらきっと良くないことが起こるって、信心深い大人は、海で泳いだり魚をとったりするのも嫌がるよ」
「……そういう信仰なのね。ふうん」

偉大なる勇士シンバルですら、船に乗るといったら尻尾を巻いたのだ。星霊信仰の殿堂では、海に出るということはよっぽどのことだったのだろう。
しかし、他の戦士がしり込みする中、カラッテだけは勇敢に船に乗る事を約束してくれた。しかし、そのように勇気あるカラッテですら、よく見ると足が震えている。
「カラッテも無理してこなくてよかったんだぜ。怖いのにどうしてきたんだよ」
「だって、正臣がまた危なくなったら嫌だし。船で首がどうこうなったのだって、私がそばにいたら何とかできたかもしれないのに。それにその、流石に部族が一人もついてこないっていうのは、一族の名折れだし……」
「大丈夫だよ、別にヘマは踏まないって。その場に居ないからってカラッテに責任なんてないんだぜ？」
正臣がそう言うと、一緒にオールを動かしていたＡ子が、思い切り正臣のわき腹に肘を入れた。
「いってぇえ！」
「ほんっと、鈍感は嫌われるっすよ、船長」
面白くないという顔で目を閉じてから、いそいそと双眼鏡をとりだして、遠目にＡ子は無人島を眺めて声をあげる。
「ああ、船長。船が見えたっすよ」
「マジで？ ……ほんとだ。ガレオンの後ろが取れてるじゃないですか」

A子の話通り、無人島を東回りに迂回しきったところで、ガレオンの船尾部がちょうど取れる場所にバルシャはやってきていた。
A子の航海術の高さに、正臣は改めて驚き、舌を巻く。
よくよく考えれば、最初の漂流の時に船が沈まなかったのだって、ただの偶然ではなく、A子の航海術によるところがかなり大きかったはずだ。
並みの航海士では、何も目印がない海の上をまっすぐ進み続けることは困難に違いないからである。
「武装ガレオン。大砲は勿論、船の耐久力から収納力、どれをとっても一級品という、一国家の主力戦艦っす。国旗は掲げられてないっすけど、あんな船、普通の海賊は持ってないっすよ。セレン帝国の軍船だって言うのは本当かもっすねぇ」
A子が遠目に見える大きな船を望遠鏡で眺めながら言葉を続ける。
「あれ、あんなに大きな船なのに、殆ど誰も乗ってないみたいっすよ」
「ガレオンに乗ってた船員を揚陸するキャラベルに乗せ換えたんじゃないですか？　すし詰めでもわずかな時間なら問題ないでしょうし」
かもしれないっすね、とA子は望遠鏡をおろして正臣を振り返る。
「だったら、今は絶好の侵入チャンスっすよ。ガレオンには相手の親玉とちょっとの兵隊しか残っていないってことっすから。でも、それを見越した罠かもしれないっす」
「……考えるとドツボにはまりそうだな。よし、行きましょうA子さん。罠だろうがな

んだろうが、手をこまねいてたら皆仲良く星霊にやられるしか無いんだから」
「そりゃそうっすね。じゃ、船を近づけますよ、船長」
A子とカラッテ、正臣は、オールを持ち上げて漕ぎ始める。
しばらく漕ぐと、意外にあっさりと船尾部までやってくることが出来た。
見張りに発見されることもなく、正臣達は船を隣接させることに成功する。ガレオンに比べればバルシャは本当に小さな船で、一旦船尾に取りついてしまえば、遠目にはバルシャなど目に映らなくなってしまう程だ。
船尾部には錨が下りている。どうやら停泊しているようだ。
船員が居ないので、船が流されないよう停泊しているのだとすれば、本当に今が侵入、襲撃のチャンスである。
錨につながる太い鎖は船の外壁をよじ登るのに最適な太さをしている。
正臣はロープを肩に掛けるとバルシャから鎖に飛び移って、そのまま鎖をするすると登って行く。正臣が先に鎖をよじ登り、上からロープをたらして他の二人に登ってこさせるという作戦だ。
一年前なら到底不可能だった芸当だが、今となっては簡単に出来るのだから驚きだ。ワーに感謝かな、と苦笑しながら、正臣は船尾部によじ登って、辺りを確かめた。
幸い、甲板には誰もいない。見張りすらも居ないようだ。
（……あまりにも無防備すぎないか？）

正臣は不審に思ったが、とりあえず肩に掛けているロープを下ろしてA子とカラッテを船の上に引き上げる。
現在時刻は夕暮れ前。
この調子だとあと二、三時間もすれば真っ暗になるだろう。
正臣が耳を澄ますと、船の内部は驚くほど静まり返っていた。
「やっぱり、お留守って雰囲気っすね」
「何処へ行ったのかは知らないが、居ないって言うなら好都合だ。今のうちに船の中をさぐっちまおう。もし船長っぽいやつが居たら捕まえるぞ」
「了解っす」
「わかったよ！」
A子とカラッテと、三人で靴を脱ぎ捨てる。なるべく足音を立てないようにするためだ。ここまで来てしまえば靴が無くても問題ない。正臣は辺りを見回し、船内への入り口の扉に近づいていく。
「……？　マサオミどうしたの？」
立ち止まった正臣に、カラッテが怪訝そうな声をあげる。正臣は眉をひそめて立ち止まり、あたりをきょろきょろと眺めまわした。
「さっきから思ってたんだけど、いくら留守だからって、やっぱり見張りが一人もいないのは流石におかしいだろ。相手はこっちに船があるのを知ってるはずだ。何度か手下

だってやられてるってのに……」
「ご名答！」
正臣の言葉が言い終わらないうちに、正臣のすぐ脇で男の声が聞こえる。
その声に寒気を覚えて、正臣は反射的に全力で後ろに飛び退いた。その瞬間、銀色にひらめく剣の一閃が正臣の居た位置を通り抜けていく。
「なっ……！？」
その剣戟の正体は、扉の近くの物陰に気配もなく隠れていた。
剣を振るったのは白い鎧を着た騎士風の青年である。
「馬鹿な、避けられるタイミングじゃなかったはずだ！」
不意を突いて、避けられないタイミングで襲い掛かったはずが、必殺の剣がいとも簡単に避けられてしまった。騎士の青年はその事に驚愕しているようだ。
「マサオミ、今度は出来たね！」
「当たり前だ、こっちは一度首をやられてるんだ。二度も不意打ち食らってたまるかよ」
脂汗を出しながら、正臣がしゃがみ込むと、それと同時に上から声が聞こえてくる。
「へえ、声を聴いてから避けるかい。凄い反射神経だな」
正臣は驚いて上方へ顔を上げる。
いつの間にか、マストの上に寝っ転がってリンゴをかじってる黒衣の男が、正臣を見下ろしているのが見えた。

驚いて目を丸くしている正臣に、肩を竦めて男は声をあげる。
「隠れ身の魔法だよ。初歩中の初歩だろう？」
男はマストの上に腰掛けなおして正臣を、見つめる。
「魔法なんて生まれて初めて見ました、なんて顔をしてるように見えるがどうかね」
「生まれて初めて見たんだよ、悪いかよ」
「なるほど、やはりそうか。そりゃあ悪かった。馬鹿にしてすまないな」
男は正臣の返答に口元を釣り上げて笑って見せる。
「まぁ、それはさて置き。今の反応は中々良かったぞ。相手を見てから避けられるなんて相当反射神経がないとできない芸当だ。流石ワーの中で暮らしているだけはある」
「別にお前に評価されたくてやってる訳じゃないんだがね」
長ったらしくしゃべる男を見上げつつ、石でも投げてやろうかと歯噛みしながら、正臣は目の前の男に吐き捨てた。しかし、男は気にした様子もなく、自分の話したい事をだらだらと話し続ける。まるで正臣を馬鹿にしているかのように。
「まぁ、聞けよ。筋はいい。だが冒険者の身のこなしとしては三流だ。間違っても及第点には届かない。不審に思ったなら甲板に上がってから動くべきではなかった。注意して観察すれば異常に気付いたはずだ。違和感の正体を探し当てるまでは、その場で周りを観察し続けるのがプロの動きというものだ」
男の顔に刀傷があり、海賊のような黒服を纏い、そしていかにもいった悪人面をして

いる。海賊船の船長と言われれば実にしっくりくる風体だ。
「まあ、だが。その反射神経じゃ、多少『うかつ』でもなんとかなってしまうんだろうな。ハルヴェルト、もう良いからさがれ。お前の剣じゃそいつには三日掛かっても当たりやしないぜ」
「御冗談を。私は聖騎士団員でも剣の腕は一番であると自負しています。こんな丸腰の素人に当てられない筈がない」
「若造が色気を出してはねっ返るなよ。騎士にあるまじき不意打ちで確実に仕留めようとして、外したんだろうが。そんなお前ごときの剣術が、正面から相手に通用するとでも思ってるのか？」
「……！」
「お呼びじゃあ無いんだよ坊や。大人しく下がって大人の戦いを見学しておきな」
男の言葉に煽られ、侮蔑され、ハルヴェルトは顔を真っ赤にする。
青年の怒りはそのまま男に対して向かうかと思われたが、何故か一転して正臣に対して剣の切っ先を向けてくる。
「良かろう、ならばこの賊を切り伏せて、私の剣が児戯で無いことを証明します。賊め。この聖騎士ハルヴェルトを侮辱した罪、その身体を持って思い知らせてやる！」
そのまま、聖騎士ハルヴェルトはがむしゃらに正臣へ突撃してくる。
「いやいやいやいや、俺、何にも言ってないじゃん！」

何故か自分が青年を挑発したかのような話の流れになって、正臣は全力で抗議する。
どうしてあの会話の流れで、その矛先が自分の方へ向かってきたのか、少し……いや、かなり意味が分からない。
「ああ、ええと、ハルヴェルトさん？　ちょっと、落ち着きましょうよ」
「黙れ賊め、聖騎士を侮辱した罪は重いぞ。我が剣で切り捨ててくれる！」
「だから俺は何にも言ってないだろうが！」
激怒している青年は怒りで正常な判断ができないようだ。
まるで正臣の話を聞こうとしない。
銀色に輝く美しい直剣を二重三重に閃かせて、力任せに正臣に斬りかかってくる。正臣は転がる様に距離を取ろうとするが、ハルヴェルトも人並外れた瞬発力で、前へ前へとぐいぐい距離を詰めてくるので、まったく距離を稼がせてくれない。
「ガキが……まぁ、良い薬にはなるか」
そんなハルヴェルトの様子に、男は舌打ちして不機嫌そうな表情を浮かべる。
正臣は何か文句でも言ってやろうと思ったが、こう立て続けに剣を振られると避けるので精いっぱいだ。
「正臣、猫足立ち、にゃんこの構え！」
次の瞬間、後ろからカラッテが叫んだ。
その声を聴いた途端に、正臣の身体の使い方が、カラッテとの練武仕様に切り替わる。

言われるままに爪先で立ち、両手を持ち上げる構えをとった。にゃんこの構えというと可愛いらしく聞こえるが。両手を持ち上げて前に出す、合理的な防御の構えである。
「そのまま先の先。今なら簡単に出来るはずだよ！」
カラッテの言葉に正臣は目を見開いて、訓練の時と同じように「先の先」を行おうと身構える。すると、カラッテとの訓練の時よりも遥かに解りやすい挙動で、青年は剣を動かし始めた。
カラッテの時は何となく程度にしか判らなかった「来る感覚」が、今になって露骨なまでに見え始める。
人間は緊張しているほど、また感情が高ぶっている時ほど、挙動の起こりが分かりやすくなる。相手が動こうとする瞬間が、電気のようにびりびりと伝わってくるのだ。
青年の殺意が痛いほど正臣の身体を叩いてくる。そのせいか、相手の動きの「起こり」が実に判りやすい。
（なんだこいつ、カラッテやヘラジカなんかよりずっと判りやすいぞ）
正臣は、目の前の青年の動きに、怪訝そうに眉を顰める。
相手が何をどう振ってくるか、こうなってしまうと最早丸見えだ。
いくぞー、とでも言わんばかりの冗長な構えから、とぉー、とでも聞こえてきそうな、丸見えの軌道で剣を振ってくる。
正臣がちょっと横に移動するだけで、相手の攻撃は当たらない。

振ってくるタイミングは勿論、身体を見ているとどうやって振ってくるかも一目瞭然である。「ひょっとして馬鹿にされているのかな？」と疑問に思いながら、正臣は予測通りに飛んでくる青年の剣戟を全てひらひらと回避してしまう。

「こいつ、ちょこまかと」

「正臣、下の五」

カラッテが声を上げると、正臣は反射的に手を伸ばして、掌底で青年の顎を打ち上げる。カラッテの組手での「答え合わせ」で、動きの全ては頭の中に叩き込んである。カラッテが逆に言う側になれば、正臣は操り人形のように同じ動きを再現することが可能だ。

手のひらで顎を打ち上げると、ハルヴェルトは回避できず、「ぐはっ」とわかりやすい悲鳴を上げる。顔を殴られるなど中々無い事なのだろう。

ハルヴェルトが露骨に怯むのが見える。

「正臣、右の六！」

カラッテに操られているかのように、反射で正臣は、くるりと大回りの回しひざ蹴りを放って見せた。カラッテの言葉に考えるよりも先に体が動く。

次の瞬間、顎を掠めるように蹴られたハルヴェルトは白目をむいて、あっけなくその場に倒れ伏してしまった。強烈な脳震盪を起こしたようだ。

目の前にうつぶせに倒れる青年を見下ろして、正臣が目を丸くする。

「おお、倒せちまったよ、マジか」
「あたりまえだよ、私との訓練をなんだと思ってたんだ！」
「船長、やるっすねー！」
その様子にA子も大はしゃぎだ。その様子を見降ろしながら、ああ、言わんこっちゃないと黒衣の男が身体を持ち上げる。
「貴様ぁ！ 良くも聖騎士ハルヴェルトを、次は聖騎士シモン・デュナークが相手だ！」
その時、物陰からいきり立ってシモンと名乗る少年が飛び出してきた。ハルヴェルトの仲間であろうか。正臣が慌ててにゃんこの構えに戻ると、上から声が響く。
「汝、己が信仰に関わりなき時は、神に在って立てられた者に従え。いざや聞かん？」
その声はどこまでも低く威圧的で、聖騎士シモンは顔を真っ青にすると、後ろへすごすごと下がる。
それと同時に、マストの上から男が甲板に飛び降りてきた。
十メートル以上は高さがあると言うのに、散歩でもするかのように着地して、男は正臣の方へ歩いてくる。
「そこで伸びてる間抜けは、一応上位の聖騎士である。それを子供扱いするとは、侮れんな小僧。名前を聞こうか」
「……正臣。法月正臣だ」
「ホーヅキ？ 面白い名前をしているな。観察眼もなかなか良いし、さっき使った、先の

先だったか？ 相手の挙動に反応して、相手の攻撃が発動する前に丸ごと潰す技術、あれが特に良かった。凄い技術だ。あれではフェイントも何も関係ない。何かやろうとしたらそれを丸ごと潰されちまうんだからな。是非うちの盆暗共にもご教授願いたいもんだ」

男は相も変わらずべらべらとしゃべるが、どう攻め込んでも攻撃を当てられる気がまるでしない。男の存在感に、正臣は危険を感じて思わず後ずさった。

「おいおい、嫌わないでくれよ。この船に招待して、こうしてお客さんがくるのを今までずっと楽しみに待ってたんだぜ？」

「……は？」

威圧するように正臣は意味が分からないと男に声をあげる。男は口元を釣り上げながら、さも当たり前のように話し続ける。

「最初から、お前はこっちで始末する手はずだったのさホオヅキ。大方、捕虜にした屑共から星霊の話を聞いて此処に来たんだろう？ 屑共は脅せば〝べら〟べら喋るからな」

「……」

正臣がだんまりを決め込むと、男は目を細める。

「ワー共に、異端な考え方を行う『人間』がまじってることは、屑共が全滅したことでおおよそ察しがついていた。ワー共は普通に正面から潰してしまえば怖いもんじゃないが、ワーに知恵をつけられると非常に厄介だ。だから追加組の屑には、あらかじめ『星霊』の事を話しておいたのさ。ワー共の『知恵者』は捕虜から情報を得ようとするに違

いない。そうなりゃ、船嫌いのワーを置いてこっちに遊びに来るしかなくなるって訳だ」
男の口ぶりに、正臣は冷や汗を流す。男の言が確かなら、正臣達は最初からこの男の手の上で踊っていたことになるからだ。
「A子さん。こいつ、やばいぞ」
「腐っても一国の組織の長クラスっすよ。やばくなきゃ務まらないっすよ！」
今更、何ビビってるんすか、とA子がジト目になると、正臣は我に返ったように笑みを浮かべて見せる。
「おお、いいねぇ、その表情。さては星霊石がブラフだと思ってるな？」
男は声を上げると正臣の前に碧い球を懐から取り出して見せる。
「ところがどっこい本物だ。枢機卿猊下の権限で持ち出しが許された『聖遺物』さ。間違いなく、これが滅びの七夜、海王イル・スオウの星霊石だ。これが目当てで来たんだろうホオヅキよ。欲しければ力ずくで奪いに来い。力比べと行こうじゃないか」
「最初からそのつもりだよ、そのバカみたいな爆弾は没収させてもらうぜ」
構える正臣に、くっくっと押し殺すように笑って、男は声をあげる。
「行くぞホーヅキ。俺はグロフィス。悪党のグロフィスだ」
「ガールウィじゃねえのかよ」
「その名前は何かの間違いだ。忘れろ」
「別に名前なんてどうでもいいけどな」

グロフィスと名乗った男は腰に下げている剣を抜きもせずに前進してくる。
相手が強いのは、見ればわかる。出来れば逃げ出したいほどだ。
だが、逃げ出すわけにも行かないだろう。
正臣は覚悟を決め、『狂い』ガールウィ改め、『悪党』グロフィスを相手に拳を構えた。

○

初手は前蹴り。正臣は踏み込むと同時に、サッカーのシュートよろしく思い切り蹴り上げようとした。当然グロフィスはその蹴りを左へ移動して簡単にかわしてしまう。
当然正臣もそれは分かっているとでも言わんばかりに、横に回ったグロフィス目掛け、後ろ回し蹴りに移行し、グロフィスの後頭部を狙おうとする。だがグロフィスは、それも体の軸をずらして螺旋を描くように時計回りに移動して、あっさり回避してしまった。
「いやはや、流石に身のこなしは早いな。でも早いだけだな。真面目にやってるか？」
「うるせえ！」
グロフィスの身体は自然と半身になり、正臣から見える面積が少なくなる。
正臣の計画では、回し蹴りの終わった脚を軸足にして、飛び膝蹴りで腹部を狙うつもりだったのだが、腹部を隠されてしまったので、顔めがけて回し蹴りへ切り替える。
「おいおい、素人かお前。くるくる回るなよ。蹴るなら前蹴りだけにしておけ」

グロフィスはそれを見ると、正臣の回し蹴りが始まる前に、根元の太もも手のひらでぽんと抑えてしまう。これをやられると、回し蹴りそのものが発動できない。
回し蹴りができないと自然と両足が閉じて揃ってしまい、バランスが悪くなる。そこをグロフィスは突き飛ばして、いとも簡単に正臣を転倒させてしまった。
正臣はバランスを崩して、背後に転がされる。
「まあ、すじは悪くは無いが。蹴りにばかり頼ってるとそうなる」
正臣が蹴りを中心に攻撃を行うのは、単純に蹴る方が強いからと言う理由である。
車よりも早く走れる脚で蹴ったら強かろう、という単純な発想だ。
勿論それを勧めたのはカラッテであり、それを実現させるために半年間練習を重ねてきたのである。
カラッテがあえて蹴りを進めたのは勿論、正臣が考えている以上の理由があるからだ。
まず鎧などを相手に拳で戦うのは、ケガを負いやすくリスクが高い。
二つ目に、戦いの場では基本空手ではなく武器をもっているのだから、武器を持ちながら行える蹴りの方が使い道が多い。ならば蹴りの方が優先度が高かろうと言うものだ。
三つ目に、足腰を中心に鍛えれば耐久力、機動力、その他諸々が総合的に粘り強く身に付くのだ。
以上の理由から、正臣は徹底的に足技を叩き込まれたのである。
土壇場でいつも頼りにするのは蹴り技なのだ。

「まだ、まだぁ！」
仰向けに転倒している正臣は、両手で地面に手を当てると、両足を持ち上げて跳ね上がった。
腹筋を使って両肩を地面に設置させ、両手をばねの様にしてグロフィスに蹴りかかるのだ。ドラゴンフラッグからの飛び蹴り、と言えばわかりやすいかもしれない。
「体術の訓練を始めて半年ってところかね」
しかし、それもグロフィスは避けるどころか僅かに軌道をずらしながら、前に進んで正臣とすれ違ってしまう。そのまま飛び上がった正臣の太ももを持ち上げると、空中で風車のように回転させ、地面に頭を叩きつけるという離れ業をやってのけた。意味も解らず正臣は、その頭を掴まれて甲板にたたきつけられてしまう。
大きく火花が眼下に散って、正臣は気が遠くなるのを感じた。
「竜巻落としってんだ。受け身が取れないから効くだろうが？」
予想外の衝撃に昏倒しかけ、脳震盪を起こす正臣を、グロフィスはあっさりと首を絞めながら片手で持ち上げて見せる。
（なんだよ！　何をされてるのか、さっぱり理解できねえ）
正臣はあっという間に窮地に陥った現実を理解できず、受け入れられずにいた。脱出を試みることも忘れて、何故こうなったかの理由を頭の中でぐるぐると考える。

――見えないほど早くは無かったはずだ。
――何をしたのかも見えたはずだ。
――人間離れした動きでもなかったはずだ。

でも、やはり何をされているのかがさっぱり理解できない。
突きつけられたのは、一瞬で制圧されたという結果のみだ。
まるで腕の良いジャグリングでも見ているような気分である。手元や動きは見えていても、結局ジャグラーが何をやっているのか、まるで理解出来ない。
「もう手詰まりか？　ホオヅキ」
正臣はグロフィスの膂力で首がへし折られそうになり、我に返った。
グロフィスの手を掴み、思い出したかのように脱出を試みるが、両手で振りほどこうとしてもグロフィスの手は、まるでびくともしない。
（殺される……）
グロフィスは何のためらいもなく正臣の首の骨を折りにかかってくる。相手を殺すことを何とも思っていない、そんな手つきだ。
正臣も、両手がかりでグロフィスの首絞めに食い下がる。全力で抵抗すれば何とか抵抗できなくもないが、抵抗が少しでも緩めば、正臣の首はたちまちにへし折られてしまうだろう。蹴りで反撃することも考えたが、そんな余裕すらも許されていない。

じわじわと体力が消耗されていく。食い下がる限り首の骨は現在無事だが、振りほどけない以上体力や息にも限界がある。正臣の胸中に焦りが浮かぶ。
「折れないな。流石の馬鹿力だ」
グロフィスは息を荒げるどころか、眠そうな顔すらして正臣に世間話のように話しかけてくる。その表情を見れば、まだ余裕を残しているのは明らかだ。
「なんで両手でもびくともしないのかって考えてるか？　俺が想像を絶する馬鹿力だとでも？　それは違うな。お前は力の使い方が下手なんだよ。単純な膂力ならお前の方が上のはずだぜ？」
だが、正臣はそんなおしゃべりに反応する余裕すらなくなっている。腕を掴みながらもだんだんと意識が遠のき、そろそろ限界が近づいていた。
「ここが限度か。お前、本当にワーの中で一年間生活していたのか？」
そんな正臣の様子を見たグロフィスは、飽きたとでも言わんばかりに、正臣を放り捨てる。正臣はそのまま地面に転がされて、何度もむせこんで激しく咳をした。
「ワーの生活は、世界中で最も恐ろしい新兵訓練（ブートキャンプ）だ。その辺の軍人程度なら裸足で逃げ出すような、な。肉食、食事制限、重量運動、有酸素運動等々。貧弱な身体なら十中八九途中で野垂れ死ぬが、一年間生き残れば化け物になって帰って来る。そんな地獄の一丁目からの卒業生が……お前だ。そのはずなんだがな。このザマじゃな」

「マサオミ！」
カラッテが走ってくると正臣を抱き起し、そのあと牙をむいてグロフィスを睨みつけた。グロフィスは肩を竦めて正臣の方に歩いてくる。
「次は私が相手だ、ニンゲン！」
「おいおい、そう睨むなよ。別にズルした訳でも無い。殺さずに置いた優しさに感謝をしてくれてもいいぐらいだ」
正臣は呼吸を整えると、そのままカラッテを押し返してふらりと立ち上がる。
「大丈夫だカラッテ。まだやれる」
「まだはねっ返るのか、小僧」
呆れたように肩をすくめるグロフィスを睨みつけて、正臣はつぶれそうな喉を振り絞って思い切り叫んだ。
「ワーが大事にしてる星霊を悪用して、あまつさえそれで意味もなくワーを殺すとか言ってる宗教野郎に、負けるわけにはいかないだろうが！」
そんな絶叫を前に、グロフィスは腕を組んで考え事をするように小首をかしげる。
「ふむ、宗教野郎か。言い得て妙だな。だが人は誰でも必ず己の宗教を持っているもんだ。王、人、金、権力、あるいは木で掘った偶像か。ワーの連中のような自然崇拝者もいる。無神論者は無神論という宗教に入っている。お前もそうだろう？ それを棚に上げて、人を捕まえて宗教野郎呼ばわりとは、少し傲慢じゃあないかね？」

「ごちゃごちゃうるせえ。自分達の都合で勝手に人を殺すだの生かすだの言いやがって。そんな奴は宗教野郎で十分だろうが」
グロフィスはそんな正臣の叫びを鼻で笑って見せる。
「ホオヅキよ。俺は別に好きこのんでワーを滅ぼしに来てる訳じゃないぜ。まして俺の個人的な都合で何某しに来てるわけでもない。この世界には、世界をお創りになったグレートワンズ様っていう神が居てな。その神様がお前たちワーを滅ぼせと言っているんだよ。ワーとてグレートワンズの創造物。だったら、神がワー滅ぼしたいというなら、ワーは甘んじて運命を受け入れるのが筋ってもんじゃないのかよ」
「そんな滅茶苦茶な理屈が通るかよ！」
正臣は激高して腕を突き出し、グロフィスに殴りかかる。
だがグロフィスはそれもあっさりと掌で受け止め、強靭な握力で正臣のこぶしを握りつぶそうとした。
「通るさ。この世界を造った神の恩恵に、我々はいつも預かっている。祈れば傷も治るし、病も治る。ちょっと神殿で金を払えば、ちぎれた腕すら生えてくるし、場合によっちゃ死んだ人間だって生き返る。お前たちが『回復魔法』とか呼んでいる奇跡とて、神の恩恵の表れの一端にすぎない。これらの恩恵をお前たちに与えているのは誰だ？ 神だろうが。傷を癒してもらって、恩恵を受けて、都合の悪い時だけ神など居ないなんて、流石に虫が良すぎるだろうが」

「俺はグレートワンズなんて神は知らねえ！」
叫ぶ正臣にグロフィスは目を丸くして、またしばらく考えるように腕を組む。
「そうか、知らないか。じゃあ神を見せてやろう」
その後、グロフィスは伸びている聖騎士ハルヴェルトに手をかざして、何事かを唱え始めた。すると、伸びていたハルヴェルトが、まるで怪我など最初からしていなかったかのように、あっさりと起き上がって剣を構えなおす。
「……！」
剣と魔法の世界と言われていた。
だったら間違いなく「回復魔法」と言ったものもあるのだろう。しかし、それを実際目の当たりにすると、あまりの不自然さ、薄気味悪さに正臣は絶句する。
「見ろ。お前が倒したハルヴェルトはこれで元通りだ。これが神の奇跡ってやつよ。どうだ、目の前で奇跡が起こっているぞ。神が居る紛れもない証拠だ。信じろ」
「……」
返す言葉も見つからずに、歯噛みする正臣に目を細めて、グロフィスは続ける。
「まあ、信じないよな。気にするな、そういうものだよ。たとえ神を見ても、奇跡が目の前で起こっても、その恩恵で生き返るようなことがあったもしても、お前達不信心者は絶対に信じない。信仰心が根本的に無いからだ。そういう連中は、そもそも生まれてきたことそのものが、何かの間違えの失敗作なのさ。そんな失敗作を生かしたところで

何になる。神はお前たちが居なくなることを願っているぞ。汚点、失敗、出来損ない。不信心者や、ワーなど、居なくなった方が神はお喜びになる。その為に、俺が居る」
「それがお前の理屈か、大したもんだな」
再び正臣は拳を構えてグロフィスに相対してみせる。ようやく息が整った。身体に痛みはあるが、首を絞められた以外は大してダメージを受けていないのを確認する。腕も脚も無事だ。まだまだ問題なく戦える。
「信仰心が無ければ失敗作か？ 神の思い通りにならなかったら価値がないのか？ 誰も彼も必死で生きてるんだ。それぞれいろいろ考えながら必死に生きてる。綺麗な物が見たいと願いながら、次の一日を生き延びられずに死んでいった人だっている。そんな風に一生懸命生きてる連中を、無価値だなんて言う神は、俺がこの手で黙らせてやる！」
正臣は地面を蹴った。過去に体育で習った反復横跳びを始める。それも現在持っている脚力を全力で使ってのそれだ。相手にとっては分身でもしているかのように見えるだろうか。
「おお、速い速い。こりゃ目で追うのがやっとだな」
やっと本気になったか、とでも言いたそうな顔で、グロフィスは正臣の身体の動きを目で左右に追いかける。反復横跳びという奇怪な動きは、この世界には無いのだろう。何をやらかすつもりなのかと、多少警戒しているように見える。
だが、いつまでも何かを始める気配もないのを見て、グロフィスは「こけおどしかよ」

と舌打ちした。
「おいおい、蟹のまねごとが奥の手か？」
「言ってろよ。少なくとも、俺の知ってる自称『神様』とやらは、相手が誰であれ、汚点だとか、出来損ないだとか、失敗だなんて言う奴じゃ無かったぞ」
「おや、なんだ。単なる滑稽な不信心者だと思っていたら。お前もどこかの神の使徒なのか。それは失礼した。もっと早く言って欲しいものだ。お前はグレートワンズの他に、この世にどんな力のある神が居ると主張する？　この俺に宣教してみせろ」
「……」
正臣はグロフィスの言葉には返答せず、しばらく反復横跳びを続ける。
グロフィスの視界を左右に触れさせるが「いつまでやってるんだ、馬鹿が」と、しびれを切らして腕を伸ばそうとした。その瞬間、正臣の体がグロフィスの視界から消えた。
「おっと！」
驚いてグロフィスが見回すと、正臣はグロフィスの真後ろで立ち止まる。
グロフィスが得意げに高説している間、正臣は延々と反復横跳びを行い、グロフィスの視線の左右の角度を固定させていた。
そして最後の一回で反復せず、円を描くようにグロフィスの背中に移動したのである。
反復運動に慣れたグロフィスの視線が自動的に右にいった瞬間、正臣は左の後ろに回り込んだ。グロフィスからは突然消えたように見えたことだろう。

「くらえ！」
正臣はそのままグロフィスの背中に肘を叩きつけようとした。狙いは背骨だ。
脊椎を強く打てばしばらくは起き上がれない……はずだ。カラッテにそう習った。実は恐ろしくてまだ一度も試したことのない攻撃なのだが、この男なら大丈夫だろう。
そう考える正臣の肘が、グロフィスの背骨に容赦なく突き刺さる。
「ぐはぁ！ ……なぁんてな」
だが、確かに当たった正臣の肘は、逆に激痛に襲われた。
グロフィスは目を細め、横目で悠々と振り返った。
「俺は海賊、それも悪党だぜホオヅキ君。鎧ぐらい仕込んでいるに決まってるだろう」
ブレストプレート。胸部から背中を守る機能だけを持つ簡易の鎧だ。黒衣の下に仕込むようにそれを着こんでいたのである。
正臣の肘うちがいくら強力でも、流石に金属相手では分が悪い。
「ミスリル製の特注品だ。当然魔法で守護の加護を授けてある。最初から丸腰のお前に勝機なんて無いのさ」
「……剣と魔法の世界なんて大っ嫌いだ」
起死回生の一撃を、鎧なんていう代物であっさり覆されて、正臣は歯噛みする。剣と魔法の世界の人間は何をしてくるか判らない。だから気をつけろと、A子にあれ程言われていたのに、その危惧が最悪の形で現実になってしまった。

「だから反応が遅いって」
歯噛みして一瞬思考を停止した刹那、グロフィスはもう正臣に触れるような位置に踏み込んできていた。今度は見えているのに避けられないとか、そう言うレベルの疾（はや）さではない。
正臣が慌てて蹴りで迎撃しようとするも、もう遅い。そのままグロフィスは正臣の開いた脚の間を深く踏んだ。そして体重を乗せて思い切り体当たりをして見せる。
「……！？」
次の瞬間、正臣は宙に浮いて吹き飛ばされていた。人間の体が浮いて吹っ飛ぶなんて、あり得るのだろうか。剣と魔法の世界ならありうるのだろうか。
正臣は自分が今まさに体験している現象に、驚愕する。その直後、背中に激しい衝撃を受けて、正臣は地面に倒れこんだ。全身が脱力する、動けない。
「玉点って知ってるか？ 脚と脚の間を踏まれると、人間の身体は構造的に、どうこらえても踏ん張れないのさ。指一本でも負けちまう。そこに体当たりすりゃこの通りだ」
今度試してみるといいぜ、なんてけらけらと笑いながら、グロフィスは壁から落ちてくる正臣を受け止めるように、その首を掴んで締め上げる。
「素人にしては上出来だ。ハルヴェルトやシモンだったら文句なく戦闘不能だった筈だ。喧嘩を売る相手を間違えたな。相手の強さは推し量るべきだ」
「マサオミを離せぇええ！」

次の瞬間、背後からカラッテが襲い掛かるが、グロフィスは鬱陶しそうな顔で、振り向きもせずに無造作にカラッテへ拳を突き出して見せる。
それは、正確にみぞおちに吸い込まれ、カラッテはそのまま気絶して地面に倒れ伏してしまった。
「神の使徒同士の崇高な勝負に失敗作が出てくるなよ。信仰の無い蛮族は消え失せろ」
崩れ落ちるカラッテをグロフィスがつまらなそうに見下ろす。
そのあと正臣に視線を戻して、ああ、なんだったか、と言葉を続けた。
「閑話休題だ。そうそう、お前の神についてだった。お前の知っている神と、俺の信じるグレートワンズはどうやら違う存在らしいが、その使徒同士が戦った結果がこのザマだ。お前が何の神を信じているかは知らないが、グレートワンズの方が、お前の神よりも大分強いらしい」
「くそ、が……」
「まあ、落ち込むなよ使徒ホオヅキ。お前は、良くやったぜ？　悪いのは、お前を助ける力のない、脆弱なお前の神だ。後は神に文句を言えばいい」
そこまで言ったところで、グロフィスは正臣の意識が既に途絶えている気が付いた。
「独り言は趣味じゃないんだがな」
グロフィスは正臣を海に向かって放り投げる。
「船長！」

しばらくして、船の下から水しぶきの音が聞こえて、船の上は静かになった。
「さて、お嬢さん、アンタも俺と戦うかい？」
「あいにくと、私はね、荒事は専門外なんすよ」
苦し紛れに笑みを浮かべながら、A子はグロフィスから後ずさる。隙あらば海に飛び込んで正臣を助けに行こうと、そんな様子だ。
「やめておけ。今から海に飛び込んでも助からんぞ。使徒正臣に免じてお前と、足元に転がってる犬っころだけは見逃してやる」
今の俺は気分がいいんだ、と楽しそうにグロフィスは懐の星霊石を取り出す。
その宝石はグロフィスの手の中で煌びやかに夕焼けの光照り返していた。
まるで海の全てをその中に封じ込めたような美しい碧は、底知れない海の深さ、根源的な恐怖を感じさせる。
「たとえ異教徒だろうと、神の為にまっすぐ生きる奴が俺は大好きだ。信仰には敬意を。さて、予定通りにフィナーレだ。聖騎士シモン。屑共はちゃんと仕事をしているか？」
「あ、はい。海賊達は現在砂浜で乱戦状態です」
聖騎士の少年が返事をすると、グロフィスは「よし」と声を上げる。
「ドルイドでも無い癖に、調律してもいない裸の星霊石で一体何ができるって言うんすか？」
そのやり取りに割り込むように、A子が挑発するように声を上げる。

Ａ子はこの期に及んで、グロフィスがはったりを言っていると信じていた。いや、正確にはそう信じたいと願っていたというのが正しいだろう。
グロフィスはその問いかけに、にんまりと笑って見せる。
「確かに、星霊を封じた星霊石から力を取り出して使うのがドルイドの魔術だ。力あるドルイドなら力を最大限取り出して、封じられた星霊を野放し状態に限りなく『近づける』事ができる」
「でも、ドルイドじゃないお兄さんは簡単な開放もできないっすよね」
「もちろんできないとも。そもそも、俺はこの星霊石から力を取り出そうとは思っちゃいない。やることはもっとシンプルだ。こうするんだよ」
グロフィスはそういうと、その宝石を握りつぶすように力を入れていく。しばらくして星霊石にヒビが入り、ぐしゃりと砕け始めた。
「な、な！？ ちょ、星霊石を壊してどうするんすか、そんなことしたら！」
「そんなことしたら『星霊が野放しそのものになる』か？ 覚えておきなお嬢ちゃん。最初期はこうやって星霊を野放しにして使ってたんだよ。ドルイドの術ってのは星霊を制御をする術だ。『制御しなくていいならば』、ドルイドの術など必要ない。封印石をぶっ壊して、中の星霊を解き放ってやればいい」
予定通り、とでも言わんばかりに、グロフィスは狂ったようにげらげらと笑う。
「見ものだぜお嬢ちゃん。北海の海王。滅びの第一夜。世界を覆う大洪水のお出ましだ。

破壊しか知らない化け物、無慈悲に人を殺すためだけの存在。おぞましいだろう。神の怒りの権化という奴さ。滅多に見られるものじゃないぜ」
先ほどまでは良く晴れて澄み渡っていた夕焼けの空が、黒く曇って雷鳴を帯び始める。
「さあ、思う存分暴れろよ化け物。お前の存在意義を果たしやがれ！」
一体何が怒ろうとしているのか、Ａ子は驚愕の表情で空を見上げるのだった。